

地域交流活動 報告書



杏林大学 2023年度 地域交流活動報告書

発行日 2024年9月

編集発行 杏林大学 地域連携センター

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1

TEL: 0422-47-8000(代) FAX: 0422-47-8054

<https://www.kyorin-u.ac.jp/univ/area/activities/archives/>



杏林大学 地域交流活動報告書 刊行にあたって

杏林大学における地域交流活動の さらなる発展と充実を	1
学 長 渡 邊 卓	
杏林大学の学部間連携の強化により、 地域連携の発展、教育・研究の向上を目指す	1
地域連携センター長 石井博之	

地域総合研究所 指定研究活動

① 健康寿命延伸 健康教育、街づくりを意識した 情報の利活用に関する研究	2
② 健康寿命延伸 手術などの治療を受ける患者さん向け あんずリハビリ運動動画の作成	4
③ 災害に備えるまちづくり 東日本大震災からの復興と課題発見	6
④ にぎわい創出 「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と 実施による新たな地域観光振興の創出に関する研究	8
⑤ にぎわい創出 COVID-19 の影響を受けて拡張した 関係人口増加施策に関する研究 ーワーケーション等の新たな観光形態への取り組みを事例としてー	10
⑥ 健康寿命延伸 地域在住におけるパーキンソン患者の 慢性疼痛緩和	11
⑦ 健康寿命延伸 「杏林型ウェルネスツーリズム」に おける保健分野の有効性に関する研究	12
⑧ にぎわい創出 特別な支援を必要とする 子どもの保育園における課題	14
⑨ にぎわい創出 特別な支援を必要とする 子どもの学童保育における課題	16
⑩ 災害に備えるまちづくり COVID-19 感染拡大防止を踏まえた 避難所防災活動	18
⑪ 生きがい創出 地域在住高齢者に対する認知症予防の取り組み ー農作業療法を用いてー	20
⑫ 災害に備えるまちづくり 多摩川流域における生物指標を用いた 氾濫リスクモニタリング手法の開発	22

※役職や学科等の名称は2023年度当時のものです。

地域における社会貢献活動

① 特定活動 BLS 指導を通した実践的な災害対応能力の 向上と共助精神の涵養	24
② 特定活動 三鷹市における健幸教室の開催	25
③ 特定活動 「生涯スポーツの機会提供」プログラム	26
④ 特定活動 多胎育児支援活動	27
⑤ 特定活動 幼児期の親子を対象とした性の多様性に対応した シナリオによる「いのちのおはなし会」の実践	28
⑥ 特定活動 花と迎える年末年始	30
⑦ JR 東日本との協働による「学生が考えた駅から ハイキング」プログラムの企画・運営	32
⑧ 備えとしての関係づくり ー避難所でも高齢者と子どもが心身共に健やかに暮らすためのアクティビティー	33
⑨ 地域で暮らす子どもの救急対応の研修会 ー乳幼児を預かる方への教育支援ー	35
⑩ 川越市「玉力製菓」との商品開発企画	36
⑪ 地域医療に貢献する診療放射線技師の仕事体験	37
⑫ Mindful Community Project ー「マインドフルネスサロン」による地域支援ー	38

教育

地域を志向した教育活動 2023 年度「高齢社会における地域活性化 コーディネーター養成プログラム」開講	40
--	----

地域総合研究所・地域連携センター

地域連携を推進する 「2023 年度 杏林大学地域総合研究所フォーラム」を開催 『地域貢献活動の発展について考える』	41
--	----

地域との連携活動

自治体他との連携	42
その他の地域交流活動	46

2023年度 杏林大学公開講演会・公開講座	47
-----------------------	----

杏林大学 地域交流活動報告書 刊行にあたって

杏林大学における地域交流活動の
さらなる発展と充実を



学 長
渡 邊 卓

本学は医療機関を母体とした医療系大学としてスタートしたことから、当初より診療を中心に地域との緊密な関係を築いてまいりました。その後、人文・社会科学系の学部が創設され、新たな視点から地域連携や交流が展開されることとなりました。2013年には、文部科学省の「地（知）の拠点」補助事業に採択され、地域交流活動を全学的かつ体系的に推進するための体制が整備されました。補助事業は2019年に終了しましたが、その後も地域との連携を重視し、さまざまな活動が継続されております。

ここに2023年度に実施された地域交流活動をまとめた「地域交流活動報告書」を作成いたしました。東京都三鷹市、武蔵野市、羽村市を含む協定に基づく連携自治体、そして2023年度新たに包括連携協定を結んだ自治体や団体のほか、多くの皆様の絶大なるご支援のもと、本学と各地域との交流活動を実施することができました。ここに厚く御礼を申し上げます。

地域社会との交流活動を今後さらに発展、充実させるべく、私共は成果の検証とそれに基づく改善を重ねてまいりたいと考えております。本報告書がその良き指針となることを期待しております。

引き続き皆様のご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

杏林大学の学部間連携の強化により、
地域連携の発展、教育・研究の向上を目指す



地域連携センター長
石 井 博之

本学は地域社会により有益な貢献を果たすことを活動目的として、2012年に「地域交流推進室」を設置し、医療系学部と社会科学・人文科学分野の学部を持つ総合大学としての特長を活かしながら、地方自治体などと交流活動を進めてきました。「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」「にぎわい創出」などを軸に活動しながら、2022年度には「地域連携センター」へ改称し、地域とのつながりをより深めることを目指して、学内の学部間・学科間連携を強化するべく取り組みを進めてまいりました。

本学と自治体との連携は三鷹市、羽村市、武蔵野市など東京都内にとどまらず、静岡県、秋田県や宮城県などに加え、2023年度には愛知県田原市、及び社会福祉法人むうぶとの包括連携協定を締結したほか、三鷹市および特定非営利活動法人Mitakaみんなの防災と防災協力体制構築に関する三者協定の締結などを進めており、今後さらにこれらの連携を活かして活動を充実させていきたいと考えています。

コロナ禍では感染対策などで地域活動が制限されるなか、これまでの取り組みが本学学生や地域の方々に必要とされていることを実感しました。地域活動が従来通りに戻ってきた2023年度はそれぞれの取り組みがさらに発展し進められました。「地域総合研究所フォーラム」では4学部の学部間連携を活かした取り組みを報告し、杏林型地域貢献の発展を目指して、社会貢献、教育、研究の質的向上を実現するための方向性を示すことができました。

このような時代の中で発展している我々の取り組みについて、地域交流活動報告書にまとめることができたことを心からうれしく思っております。

是非本報告書を御一読いただき、本学の活動に様々な形で御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地域総合研究所の取り組み

地域総合研究所は、本学が有する4学部の教育・研究資源をより有効に活用するために、学部間連携を強化し、地域内各団体との連携も深めながら

- ① 学生と地域関係者が共に学ぶ「生きがい創出」
- ② 退職団塊世代を中心とした地域の人々の「健康寿命延伸」
- ③ 大規模自然災害に備える「災害に備えるまちづくり」
- ④ 地域の活性化を目指す「にぎわい創出」

という4つの地域の課題解決に向けた取り組みを進めています。

以下、この取り組みを行っている中から、2023年度に採択された12の研究テーマを紹介します。

地域総合研究所 指定研究活動 ①

健康寿命延伸

健康教育、街づくりを意識した情報の利活用に関する研究

- 実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
- 担当者：長島 文夫 医学部 腫瘍内科学 教授
地域総合研究所 所長
中島恵美子 保健学部 看護学科 教授
橋詰 崇 病院庶務課 課長

背 景

2023年に策定された厚生労働省の第4期がん対策推進基本計画案では、「がん教育及びがんに関する知識の普及啓発」が掲げられている。また、「がんとともに尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」では、相談支援及び情報提供として、確実に必要な情報及び正しい情報にアクセスできる環境を整備することも掲げられている。

このため杏林大学付属病院は、がん診療拠点病院としての医療施設の工夫とがん教育における情報提供を整備していく必要がある。がん診療における情報提供とがん教育において、がん医療や予防、生活習慣の改善など、共通する内容を連動することで効果を高め、がんになっても安心して暮らせる街づくりの構築につながることを期待される。

目 的

小中高等学校の学習指導要領では、生活習慣病などの予防等について学習する際に「がんについても取り扱う」ことが明記され、児童生徒の発達段階に応じた「がん教育」

が行われている。杏林大学でも東京都の依頼に応じて授業の支援を行っている。

本研究では効果的な授業支援の方法として、教育アプリを開発し、広く普及させることを目的とした。

さらに街づくりを意識したあらたな見守りの仕組みを構築する研究開発も準備した。

実施内容

(1) がん教育とがん教育アプリを開発（がん教育を通じて、地域社会へ健康教育を展開）

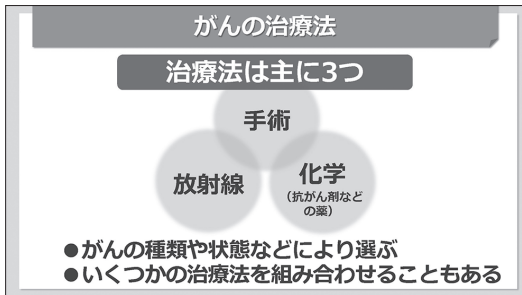
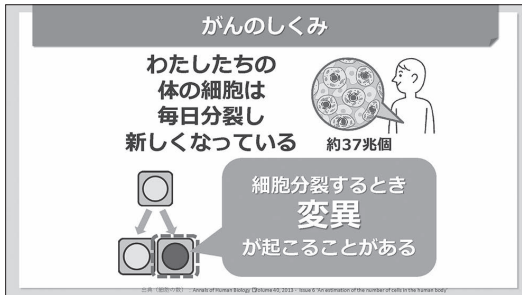
小中高等学校では、健康教育の一環として「がん教育」が行われている。我々ががん医療に従事する教育者も東京都から依頼を受けて対応してきた。

今年度は多摩地区の学校から依頼を受け、出張授業を行った。具体的には、

- ①学校側と事前相談を行い、学校側の希望する授業内容や配慮が必要な生徒・家族の有無などを確認
- ②続いて、生徒に事前アンケート（知識確認の小テストおよび生徒からの質問＜自由記載＞）を行い、がんについての基本的な理解度を把握
- ③学校からその内容を我々にフィードバックしてもらい、例えば、理解度の低い項目に重点をおいて授業当日の内容に反映

などである。また、授業後には生徒へアンケートを行い理解度の向上についても確認をした。

がん教育アプリでは、10の質問とその解説動画を用意し、最後には自由記載できるように作成した。さらに、このア



がん教育の授業で用いたスライド

ンケート結果や自由記載の質問内容を必要時にGoogle上で確認でき、家族とも共有できるように調整した。

◆がん教育の授業で用いたスライド（及び配布物）、教育アプリに含む項目

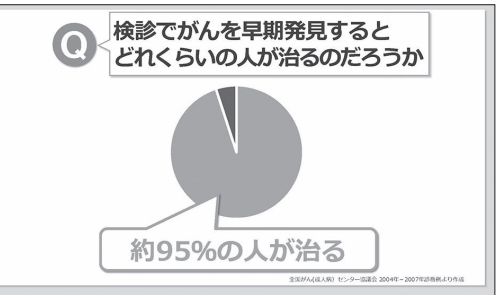
- ・がんは誰でもかかる可能性がある
- ・日本人の死因1位はがんである
- ・がんになる人は2人に1人である
- ・がんの原因
- ・早期発見すれば、がんは治りやすい
- ・がんを治療する方法は、手術・放射線・薬物療法である
- ・がんの痛みは我慢しない
- ・患者と家族を医療チームが支える
- ・がんになっても治療しながら働くことができる
- ・お父さんやお母さんががんになった時、あなたを支える仕組みがある
- ・医療費について

(2) 医療情報の収集とがん教育への展開（患者見守りを効果的に行うシステムの構築）

新型コロナウイルス感染症や自然災害など、複合災害のリスクが高まっており、緊急時には都市機能低下が懸念されるため、慢性疾患の患者が平時にどのように備えるかについて検討を重ねてきた。

スマートフォンがつながらない状況においても、あるいはスマートフォンをもともと保持していない患者でも、生体情報を家族や医療者と共有する仕組みがあれば、見守りや早期の医療介入として有効活用できる可能性がある。そこで、簡便なシステムで、かつ低電力、低コストでデータを共有する仕組みの開発に着手した。

家族や医療者とのデータ共有が可能になることで、災



害時においては安否確認にも対応が可能である。患者を家族、地域が支えるといったコンセプトを共有し、地域における新しい支援体制を提案していく予定である。具体的には、市民公開講座などの患者啓発の場だけでなく、がん教育の場を通じて、がん患者家族以外にも理解を深め、地域における多世代間支援を工夫することを目指す。

「地域活性化」「地域課題解決」などへ寄与した点を含めた活動の成果や達成状況

(1) がん教育及びがん教育アプリ開発（がん教育を通じて地域社会へ健康教育を展開）

- ・がん教育アプリを作成した（iPad上で稼働する仕組み）。
- ・多摩地区の学校にて出張授業を行った。

(2) 医療に関連する情報の収集とがん教育への展開（患者見守りを効果的に行うシステムの構築）

- ・共同研究者（ドリームグロウ、ソニーネットワーク担当者）と議論を行い、通信端末（LPWA）を用意した。
- ・生体情報（血圧などのバイタルデータ）を測定する医療機器と通信端末をBluetooth接続させ、基地局のクラウドにデータを上げて、さらにユーザクラウドに移したのちに、手元の携帯端末でデータを閲覧できることを確認した。

がん教育では小中高校生に、がんを正しく理解し、自身で考えてがんと向き合う姿勢を育むといった目標を掲げ、その延長として、がんに罹っても安心して暮らせる社会をめざすといった視点がある。

がん診療連携拠点病院である杏林大学医学部付属病院では、市民に対するがんの知識の普及啓発に取り組んでいる。

がん教育や血圧測定の実データ共有を通じて、多世代間において健康意識を高め、さらには地域での協力関係を構築することを目指していく。

手術などの治療を受ける患者さん向け あんずリハビリ運動動画の作成

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
■担当者：阪本 良弘 消化器・一般外科学 教授
百瀬 博一 消化器・一般外科学 助教

背景

わが国では、国民の2人に1人が生涯のうちにがんに罹患し、3人に1人ががんで死亡する。がんサバイバーは今後、年に約60万人増えることが予想されており、がんと共に存する時代になっている。

がん患者にとっては、がん自体に対する不安や手術・化学療法・放射線治療などによる身体的ダメージによる体力の低下で、QOLが低下し治療継続が困難となる場合もある。

がん患者の身体活動量は予後と関連していると報告されており、身体活動量を維持することががん患者のメリットになると思われる。

身体活動基準として、American Cancer Society Guidelineでは、

- ①週に150～300分間の中強度の運動あるいは、75～150分間の強度の運動、その組み合わせを達成すること、
- ②座る、横になる、テレビを見るなどの座りがちな行動などは制限すること、を提唱されている。

我々は消化器がん、中でも肝胆膵がんの外科的治療を行っているが、周術期には患者のリハビリが欠かせない。リハビリは理学療法士や薬剤師、栄養士の支援のもとに進めているが、外来で患者に接した時から手術の前後を通して、患者と話し合いながら行っているものの、リハビリの進み具合を把握するのは容易ではない。

入院中は理学療法を行いやすいが、外来通院中に、術前の患者が気軽に運動を行うのは、必ずしも容易ではない。そこで、簡便に閲覧できて行動に移せる動画やパンフレットが必要であると考えており、多くのがん患者に有益であると思われる。

目的

がん患者に対する運動療法の動画、パンフレットを作成して、がん患者の身体活動の維持向上を計る。

実施内容

対象：肝胆膵外科疾患で手術を施行、または計画している患者を対象とした。

方法：肝胆膵外科医師が椅子に座ったまま行えるストレッチ・筋力トレーニングの動画・パンフレットを作成した。

動画はYouTubeにアップし、診療を受ける患者が視聴できるようにする。Internet環境がない患者に対してはDVDもしくはパンフレットを渡す。

手術が決まった時点から動画もしくはパンフレットに沿って週2回以上の運動を開始した。手術後は退院後から継続して運動を行った。

なお、運動内容と強度は、月1回の肝胆膵外科部署内のカンファレンスで検討し、座って安静にしている状態を1 Metsとして、3-4 Mets程度になる内容で作成した。

（**主要評価項目**：ECOG performance status (ECOG PS)、Activities of daily living (IADLスコア)を運動開始前、手術前、手術後、退院後3ヶ月、6ヶ月で評価する。
副次評価項目：体重、BMI、栄養パラメーター(血清preAlb、Alb、レチノール結合タンパク、トランスフェリン)

アンケート調査：作成した運動療法について以下の5項目についてアンケート調査を行った（図1）。

- ①運動の長さ、②運動の強度、③運動の継続性、④運動の総合的な満足度、⑤新しい運動ができれば試したいか
- また、運動に対する意見や要望、感想を自由記載できるようにした。

図1

運動アンケート

よろしければ下記アンケートにご協力ください。

■患者様情報

性別	☐ 男性 ☐ 女性
年齢	☐ 20代 ☐ 30代 ☐ 40代 ☐ 50代 ☐ 60代 ☐ 70歳以上

■運動について

運動の長さ	☐ 長い ☐ やや長い ☐ 丁度いい ☐ やや短い ☐ 短い
運動の強度	☐ すごいづらい ☐ づらい ☐ 普通 ☐ 楽 ☐ すごい楽
運動の継続	☐ 継続できる ☐ わからない ☐ 継続できない
運動の総合的な満足度	☐ 大変満足 ☐ 満足 ☐ 普通 ☐ 不満 ☐ 大変不満
新しい運動ができれば試してみたい	☐ また試したい ☐ わからない ☐ もう試したくない

その他、ご意見ご要望ご感想などお聞かせください

ご協力ありがとうございました。

結果

1) 運動療法の「動画」と「パンフレット」作成

がん患者に対する運動療法の「動画」と「パンフレット」は、以下の5パートの運動内容で構成、作成した。



運動の強度は、1パートを10回ずつ行い、5パートを1サイクルとした。2、3サイクルを患者の体調に合わせて週2-3回行うよう指導した。

- 運動の開始前には以下の4つの注意点を患者に説明した。
- ①心負荷がかからないよう、運動中は息を止めずに行う。
 - ②運動中の転倒に注意する。
 - ③体調が悪い時は行わず、また痛みなどの症状が増悪する場合には運動は中止する。
 - ④主治医から制限されている運動は行わないようにする。

2) アンケート調査結果

2023年4月～2024年3月までの期間でアンケート調査を行い、返信が得られたのは4名であった。

年齢は40代1名、70代3人、性別は男性1名、女性4名であった。

各質問事項に対する回答結果は、

- ・運動の長さ……「丁度良い」100%
- ・運動の強度……「普通」75%、「楽」15%
- ・運動の継続性……「継続できる」75%
「わからない」15%

- ・総合的な満足度……「満足」75%、「普通」15%
- ・新しい運動ができれば試したい……
「また試したい」75%、「わからない」15%

であった。
意見要望の自由記載では、「この機会にできるだけ続けていきたい」「この運動をすると体が軽くなった気がする」「ジムに行っているのもうやらない」があった。

まとめ

実際に治療を担当している医師によって作成された運動の動画やパンフレットは、患者に受け入れやすく、患者の身体活動の維持向上を計る上で有用であると考えられた。

本研究の結果は、がん患者の身体活動の向上により、疲労感の軽減、ADLの改善、自尊心の向上、活動範囲の拡大から社会的交流が増加しQOLの向上にもつながることが見込まれる。

アンケート結果を参考にして今後もより良い運動メニューを作成し、地域医療に貢献していきたい。

災害に備える
まちづくり

東日本大震災からの復興と課題発見

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
■担当者：三浦 秀之 総合政策学部 准教授
佐々木秀之 宮城大学 准教授
佐藤加奈絵 地域総合研究所 客員研究員
鳥羽 真 地域総合研究所 客員研究員

背 景

石巻市は2005年に1市6町が合併した宮城県第2の市であり、東日本大震災の最大規模の被害を受けた地域である。人的被害規模は全国の1/5が石巻市であり、建物被害は震災前を100%とすると約76%が被災した地域である。半島部の低平地は殆どの地域が2.0m以上の浸水被害に遭い、災害危険区域指定されている。

大震災から10余年の歳月が流れ、石巻市ははじめ三陸沿岸地域のハード面はほぼほぼ回復を遂げ、本研究が対象としている石巻市に流れる旧北上川河口にも2022年3月末に津波や洪水、高潮に備えた河川堤防が完成した。

本研究の対象である石巻市にある二子団地は、半島沿岸部の雄勝・河北・北上地域から移転を選択した354世帯が生活する防災集団移転団地である。同団地には街びらきした2018年には河北地域から142世帯、北上地域から14世帯、雄勝地域から198世帯が移転している。とはいえ移転世帯の約61%が災害公営住宅であり、多くが高齢世帯となっているのが特徴である。

移転者は、地形と集落規模・生業と漁業形態により、集落の性格ひいては人の性格が異なる場所から移転してきている。これら地域では、コミュニティの形成をめくり引き続き困難に直面するとともに、商工業、水産業、社会福祉、教育などをめぐっても震災から12年を経てもその余波が継続している。

異なる地域から移転を遂げた団地において、地域コミュニティの形成をいかに図っていくかが大きな課題となっている。

目 的

本研究の目的は、震災後の防災集団移転がなされた地域において、その後、地域コミュニティがいかに形成されるのかを定点的に観測をするものである。また地域における生業である水産業や商工業、そして社会福祉や教育現場が

いかなる課題に直面しているのかを掘り下げることが目的としている。

さらに、それまで地域が抱えていた少子高齢化をはじめとする多くの問題が震災をきっかけにさらに悪化をさせ、全国の中で最も多くの課題を抱える課題先進地域になったといえる石巻市と東松島市（昨年度、杏林大学と包括連携協定を締結）の事業者とコミュニティに焦点を当て、これら主体が、震災後にいかなる課題に直面し、それをいかにして乗り越えようとしているのかをヒアリング調査することを目的とするものである。

成 果

本研究を遂行するにあたり、個別の関係者にヒアリングをするとともに、より和やかな場での集団での意見交換（ヒアリング）の場を設けたところ、コミュニティ形成をめぐる課題が判明したので下記に記す。

二子団地には3つの町内会が設立された。防災集団移転が雄勝・河北・北上の地域単位で行われたため、旧来からの関係が維持された形でコミュニティ構築が図られたのが二子団地の特徴である。

とはいえ、やはり町内会ごとにその特徴は異なり、震災以前から関係性が構築されてきた集団が多い河北地区中心の町内会に比べ、雄勝地区は浜ごとに文化の違いがあったことから、震災後に住民の関係性の構築が始まっている。あるいは北上のような小規模な住民数の移転がなされた地域は、よりこうした関係性の構築が難しい。

他方で移転後の関係性は親族間の交流が多いというのが二子団地の特徴である。実際、多くの地域は親族単位で移転しており、コロナ禍においても親族単位では交流が図られていたことがうかがえる。

他方で新たな町内会や地域コミュニティをいかにして運営をしていくのかという議論の場は、コロナ禍が拍車をかける形で、限定されてしまっていた。



新住民と旧住民が共同で芋煮をつくり親睦を図り、その後ヒアリングへ移行。場を温めてから話すと話しやすい環境ができるということを改めて意識させられた。

宮城大学の佐々木准教授や佐藤特任助教、学生などと共同で地域課題を掘り下げるためのフィールドワークおよび意見家交換を行う。なおフィールドワークの指導を鳥羽客員研究員が実施した。



今後の展開

少子化及び高齢化の波は、地域コミュニティおよび生産者に対して大きな課題をもたらしている。これまで地域コミュニティを支えていた町内会などの活動が、震災をきっかけに人口が流出し、それがさらに高齢化の波で歯止めがかからない状況になっている。

石巻駅前から川沿いにかけた中心市街地は、商店主の高齢化や後継者不足から老舗の閉店が続いている。新型コロナによる影響も大きく、一部で民間主体の再開が完了したものの、後には続くはずの小規模な開発は足踏み状態となっている。まちの顔である中心市街地の活性化はまだまだ途上である。

また、高齢化は、地域の産業にも影響を及ぼしている。農業及び漁業では、震災を機に廃業をした従事者も多く、それまで地域が抱えていた課題が東日本大震災をきっかけにさらに拡大している。コロナ禍が拍車をかけ状況を悪化

させている。

地域の教育環境も震災を機に悪化をしている。小学6年生と中学3年生を対象にした全国学力・学習状況調査結果によると、石巻市の児童生徒の正答率は、実施した全ての教科で全国のみならず、宮城県の値を下回っている。

また、家庭での学習時間は、ある程度まとまった時間（小学生1日1時間以上、中学生2時間以上）取り組んでいると回答した割合が、小・中学生ともに全国の値を下回った。主な原因は「長引く仮設住宅での暮らし」「家庭環境の変化」等が挙げられる。このように石巻地域では、学習環境に悩む子供たちが少なくない現実が残されている。

少子化とともに若年層が進学などに伴い地域を離れる現象が顕著であり、結果的に若年労働層の確保がますます困難になっている。こうした中で水産業や商工業をこれまでの既存の業態を維持することが難しくなり、生産性を高めることが求められる。

地域総合研究所 指定研究活動 ④

にぎわい
創 出

「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と 実施による新たな地域観光振興の創出に関する研究

- 実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
- 担当者：小堀 貴亮 外国語学部 観光交流文化学科 教授
石井 博之 保健学部 リハビリテーション学科 教授
地域連携センター センター長
古本 泰之 外国語学部 観光交流文化学科 教授
地域連携センター 副センター長
北出 恭子 地域総合研究所 客員研究員
中川 智博 地域総合研究所 客員研究員

背景と目的

2022年度より学部間連携の一環として保健学部と外国語学部観光交流文化学科の連携により、ウェルネスツーリズムの概念に基づく地域教育・研究活動を模索・実践してきた。その一環として、2022年に静岡県東伊豆町、2023年に愛知県田原市と地域包括連携協定を締結した。

各地域に共通していることは、温泉地域であることに加え、豊かな自然や地形を活かしたウェルネス観光資源を有していることである。

本研究の目的は、①「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と実施を実現し、その妥当性を検証する ②そして各地域において、新たなツーリズムの創造によるにぎわい創出を目指すことにある。

温泉の活用と効果の検証に加えて、これまでの地域連携において培ってきた健康寿命延伸への取り組みや教員の専門性を活かすことを前提に、運動やレクリエーション・栄養・温泉観光学の観点からも「ウェルネスツーリズム」を捉え、多角的な視点から意義と効果を検証した。

研究対象地域における研究・教育活動

田原市における取り組み ①

新たな温泉も利用した

「田原市ウェルネスツーリズム構想」

愛知県田原市は、渥美半島のほぼ全域に位置しており、全国でも有数の農業地域が形成されている。また、三河湾国定公園および渥美半島県立自然公園の一部を構成しており、風光明媚な観光資源に恵まれている。そのほかトライアスロン、サイクリングなどのスポーツツーリズムも盛んな地域である。

そして、2020年には同市で初となる温泉が湧出した。この温泉の泉質である塩化物泉の適応症としては、冷え性の改善や殺菌効果による傷病回復などが期待できるとされている。

水素イオン濃度（pH）は7.8の弱アルカリ性であり、肌の角質をやわらかくするとともに美肌効果もあると言われている。伊良湖岬付近に湧き出した貴重な温泉は、伊良湖温泉と命名され、渥美地区のホテルや旅館など宿泊施設、農業施設などへの配湯が行われており、新たに誕生した温泉地としての活性化が期待されている。そして、既存の観光資源と繋ぐことにより、この地を訪れることでさらなる健康と活力を享受できるような「田原市ウェルネスツーリズム構想」が提言された。

このように、ウェルネスツーリズム推進のポテンシャルが高い同市において、教育・研究活動や現地調査を実施し、地域にその成果を還元していくことを目的として、2023年に本学と包括連携協定を締結した。その概要と目的は以下のとおりである。

- ①「ウェルネスツーリズム」について、温泉効能、運動、レクリエーション、観光学の観点からその意義と効果を検証し、地域に還元する。
- ②「ウェルネスツーリズム」だけでなく、「リハビリツーリズム」「フードツーリズム」「アグリツーリズム」などの要素も検討し、観光多様性を実現する。
- ③観光と運動などアクティビティの多様性について、ウォーキング、サイクリング、スイミングなどそれぞれの有効性を検証し、地域性を活かした独自のウェルネスツーリズムを実現させる。
- ④ウェルネスツーリズムに関する「保健」と「観光」の学際的研究内容をコンテンツ化し、オンラインプラットフォームによる情報提供サービスを構築し、地域住民に活用していただく。
- ⑤本学の学園祭や各種地域交流イベントを通じて、田原市のブランディングに貢献する。

田原市における取り組み ②

「田原市観光まちづくり実践塾」開催

連携事業の第1弾は、本学教員の専門性を活かした学術的アプローチの一環として、田原市における行政・観光関連従事者に対する「田原市観光まちづくり実践塾」を開催した。

表1 田原市観光まちづくり実践塾のテーマ

テーマ	講師
第1回 環境を活かした健康で活力ある生活と観光まちづくり	保健学部 リハビリテーション学科 石井 博之
第2回 地域資源を活用した観光開発・観光振興	外国語学部 観光交流文化学科 古本 泰之
第3回 温泉の知識と心身への健康・美容効果	地域総合研究所 北出 恭子
第4回 事例にみる地域で稼ぐ仕組みづくり	地域総合研究所 中川 智博
第5回 田原市におけるウェルネスツーリズムの可能性	外国語学部 観光交流文化学科 小堀 貴亮



観光まちづくり実践塾の様子
(第1回 石井博之・第3回 北出恭子)



観光交流文化学科・小堀ゼミによる観光資源視察
写真①伊良湖温泉源泉視察 ②漁港視察 ③農園視察 ④農業体験



本事業は、田原市からの業務委託により、「田原市の活力ある地域と人を育む観光まちづくりを考える」ことをコンセプトに、本学地域総合研究所の温泉・観光・保健分野を専門とするメンバー（教授および客員研究員）が講師として、「ウェルネスツーリズム」に関する実践的な講義とワーキングを行うものである。

講師陣は、本学専任教員3名（小堀貴亮・石井博之・古本泰之）に加えて、地域総合研究所客員研究員である2名の専門家（北出恭子・中川智博）が参画した。5回にわたる講座において、リハビリテーション・地域開発・温泉・地域ビジネス等、各専門家による極めて専門性・学術性の高い講座を実施した（表1）。

研究結果

本講座を通じて、地域住民の方々にに対し、観光まちづくりを考えていくための専門的知識を提供し、ワークショップなどで意見交換や交流を図ることで、地域に根差した連

携の礎を築くことができたと考える。

最終回は観光教育活動の一環として本学観光交流文化学科の学生も参加し、日頃の観光学習の成果発表を兼ねて「ヨソモノ・ワカモノ」の視点による田原市着地型観光企画のプレゼンテーションを実施した。

その内容は、「伊良湖温泉」を核に、地域の自然や食（農産物・水産物等）を繋ぎ、渥美半島に来ると「もっと元気になる！」をコンセプトにウェルネスツーリズムを企画立案したものである。さらに温泉資源を宿泊や観光業のみに限定せず、渥美半島にある様々な資源（農業、漁業、食文化、サイクリング、マリンスポーツ等）と組み合わせ、地域全体で温泉資源の活用を図り、交流人口の拡大と地域経済の活性化に繋げることを提案した。

このように、「観光×健康」をテーマとした新しいにぎわいの創出に繋げていくことを目指し、今後も地域連携を図りながら「杏林型ウェルネスツーリズム」の構築に向けて研究活動を続けていく。

にぎわい
創 出

COVID-19の影響を受けて拡張した関係人口増加施策に関する研究 ーワーケーション等の新たな観光形態への取り組みを事例としてー

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
■担当者：古本 泰之 外国語学部 観光交流文化学科 教授
地域連携センター 副センター長
井上 晶子 地域連携センター 特任講師
森田 七徳 東伊豆町企画調整課 課長

目 的

2020年からのコロナ禍を経た近年、新たな交流人口・関係人口増加に向けた動きが活発化している。そのひとつとして、「Work（仕事）」と「Vacation（休暇）」を組み合わせた造語である「ワーケーション」がある。

テレワーク等を活用し、普段の職場や自宅とは異なる場所で仕事をしつつ、自分の時間も過ごす（観光庁）滞在のスタイルである。観光庁は「ワーケーション&ブレッジャー」の名称の元、その普及を政策的に展開してきており、各自治体においても取り組みが進められている。

例えば、本学が包括的連携協定を締結している静岡県東伊豆町では、『第2期東伊豆町まち・ひとしごと創成人口ビジョン』において、ワーケーションの推進やリモートワークを関係人口※の増加策として取り上げており、「伊豆リゾートワーケーション」（観光庁「既存観光拠点の再生・高付加価値化推進事業」）にも参加している。

※**関係人口** 移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のことをいう（観光庁）。

このような新たな関係人口増加に向けた動きが始まって数年が経過する中で、その政策の状況を整理しておくことは重要であるといえる。視点としては、ワーケーションという取り組みの地域内での持続可能性、地域社会への影響などが挙げられる。

そこで、本研究ではCOVID-19の蔓延等の様々な危機を迎えた地域における交流人口・関係人口増加に向けた取り組みについて、主に以下の視点から各地の事例を渉猟、必要に応じて先進事例の現地調査を行った。

- ① ワーケーション」等の新たな観光形態への参画
- ② 「マイクロツーリズム」「オンライン観光」への対応

その上で、地域内においてどのような体制で取り組み

がなされ、その結果がどのように現れているのかについて、特に①の「ワーケーション」に着目し、先進事例とされる山口県および本学の包括的連携協定締結先である静岡県東伊豆町を中心事例として分析した。

実施内容

- (1) 既往研究の調査
- (2) 各省庁・県単位のワーケーション施策の整理
- (3) 地域調査

- ① **山口県山口市・長門市**（半構造化インタビュー）
 - ・2023年6月29日～7月1日
 - ・ワーケーション事業に関わる行政および観光関連産業を対象として、各主体の取組の現状と今後の方向性について明らかにすることを目的とした。
 - ② **静岡県東伊豆町**（参与観察＋半構造化インタビュー）
 - ・2023年9月29日～9月30日 および2023年11月21日～23日
 - ・2024年2月16日～17日
 - ・ワーケーション事業に関与する個人や地域に生じている動きや思いを通じて、地域内各主体にとっての「ワーケーション事業の意義」を明らかにすることを試みた。
- あわせて、2024年2月の調査で、外部人材と内部人材とのネットワークに基づく活動の一つである伊豆稲取駅付帯施設「ようよう」の活動について調査を行った。

活動の成果と達成状況

コロナ禍の影響を受けた観光地において、テレワークから広がった「ワーケーション」に注目が集まり、省庁・県等による様々な支援策が展開されてきた。ただ、本研究を通じてこれらの支援策が一つの方向性で進められたというよりは、各地域が自ら抱える地域課題への対処として支援策を戦略的に活用してきたことが明らかになった。したがってそのアウトプットも多様であり、政策に対する評価は長期的な視点で見ることが必要である。

例えば、静岡県東伊豆町におけるワーケーション事業は、新たなライフスタイルを見出し実現するきっかけづくりとして取り組まれており、参加者同士、地域の人達とのつながり・交流が重視された。これは、新たな団体旅行（研修旅行）のひとつとしてワーケーションを捉え、

観光振興策に近い形で事業に取り組んでいる山口県山口市とは、同じワーケーションでありながら大きく目的が異なる。

また、東伊豆町では、ワーケーション事業を2拠点居住者や移住者に結びつけ、それによって生まれた関係・移住人口の力の内部化により、既存住民内からの新たな動きも生み出す地域の内発力に変えていることが明らかになった。

今後は、COVID-19の拡大時期を経て人的移動が再び戻ってきている現在において、ワーケーションが一時的なブームに終わるのか、新たな観光振興策として定着するのか、あるいは地方創生の目指す人の流れを創る手段として熟成されていくのか、新たな事例も取り入れつつ、



外部人材の活動事例：「まちのレセプション ようよう」

経過を分析していく必要があると考えている。

今年度の研究成果の一部については、分担者の井上晶子を研究代表者として『国のワーケーション事業は地域にどのような成果をもたらしたか～新たなロングステイヤーの芽生え～』の論題で、ロングステイ観光学会第8回年次大会において口頭報告を行った。

なお、分担者の森田七徳とは、11月21日～23日の東伊豆町での調査において、他地域、主に山口県でのワーケーションに関する調査結果を資料として、ワーケーションおよび関係人口の受入・活用について意見交換を行い、上述の学会口頭報告と合わせて東伊豆町でのワーケーション振興策への提案とした。



やまぐちワーケーション総合案内施設「YY! GATEWAY」

健康寿命延伸

地域在住におけるパーキンソン患者の慢性疼痛緩和

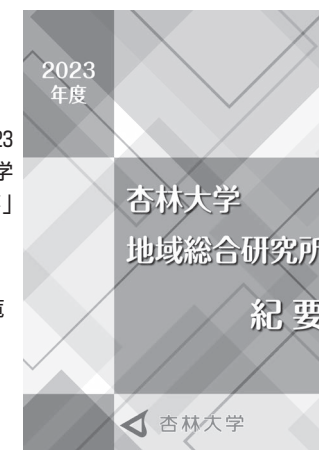
■担当責任者：青山 泉 保健学部 看護学科 講師

本研究は、地域在住の薬物治療の限界を抱えているパーキンソン病（PD）患者へアロマセラピーを用いることで、慢性疼痛の緩和への可能性を検討した。

この実施は、薬剤治療でも取り除けない疼痛により日常生活の質が低下している患者に健康寿命延伸をはかるための支援を目的とした。

※本研究については2023年度刊行の「杏林大学地域総合研究所紀要」へ掲載されています。

「紀要」はコチラをご覧ください。



「杏林型ウェルネスツーリズム」における保健分野の有効性に関する研究

■実施日：2023年5月1日～2024年3月31日
 ■担当者：石井 博之 保健学部 リハビリテーション学科 教授
 地域連携センター センター長
 小堀 貴亮 外国語学部 観光交流文化学科 教授
 相原 圭太 保健学部 リハビリテーション学科 助教
 楠田 美奈 保健学部 看護学科 学内講師

はじめに

保健学部の教員はこれまで学科間連携により、2014年から「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合地の拠点」事業の一環として、「都市型高齢社会の健康と安心」及び「健康寿命延伸」を目的とした「スポーツ機会提供プログラム」等を主に西東京地域で実施してきた。

今までの「ウェルネスツーリズム」や「ヘルスツーリズム」は、主に温泉活用を主体としたもの（スパツーリズム）が多い。そこで今回、我々は日本の観光資源である温泉の活用と効果の検証を十分に考慮に入れ、さらにそれぞれの観光地の持ち味を活かし、我々の専門領域をウェルネスの要素として加えていくこととした。

その一環として保健学部と外国語学部観光交流文化学科の連携により、ウェルネスツーリズムの概念を取り入れて我々の地域貢献発展の可能性を模索することとした。

目的と方法

1. 研究の目的と対象地域

2023年度は新たに地域包括連携協定を締結した愛知県田原市を対象に調査した。その主な調査項目は以下の通りである。

- ①観光関連関係者と健康寿命延伸プログラム実践者、市関係者との意見交換により、田原市の観光や健康寿命延伸に関する現状を把握する。
- ②ウェルネスツーリズム実施に有効な自然環境と観光資源を把握する。

この2項目の情報から、地域の特徴、ニーズを把握し、学部間連携を活かした「杏林型ウェルネスツーリズム」の方向性を模索することが本研究の目的である。

方 法

今年度は田原市と本学で地域包括連携協定を締結し、そ

の一環として「田原市観光まちづくり実践塾」を共催した。そこで私は「環境を活かした健康で活力ある生活と観光まちづくり」をテーマに講演会を実施した。その主な内容は、我々の専門性を活かした「杏林型ウェルネスツーリズム」の提案である。

講演会の終了後、ラウンドテーブル形式で意見交換を行った。今回の主な対象者（参加者）は自治体関係者、観光関係者、運動と健康に興味のある市民である。また意見交換と情報入手に際し、その主な視点は以下のとおりである。

- 1）参加者それぞれの取り組みについてと、問題やニーズについて。
- 2）健康と運動に対してなどの取り組みをする上での自然環境の有効性について。
- 3）地域住民の環境と特徴について。
- 4）ウェルネスに活かされる観光資源について。

結 果

1. 対象地域の特徴

田原市は、県の南端部、渥美半島のほぼ全域に位置する。人口60,892人、面積191.12km²の自然豊かな都市であり、農業・観光・工業・水産業などが盛んな地域として知られている。特に、市町村別でトップクラスの農業産出額を誇り、全国でも有数の一大農業地域となっている。

一方、三河湾国定公園および渥美半島県立自然公園の一部を構成する同市は、市域の約94%が自然公園区域に指定されており、海に囲まれた渥美半島特有の自然環境とともに風光明媚な観光資源に恵まれている。太平洋ロングビーチなどの海岸地域では、全国有数のサーフィンスポットとしてサーフィン世界大会や国内大会なども開催されている。

そのほかトライアスロン、サイクリングをはじめとするスポーツツーリズムなども盛んであり、世代を問わず多種多様な体験型観光を楽しむことができる観光地域が形成されている。

2. 今後の方向性について

①自然環境や観光資源活用

半島で多方面が海に囲まれていること、広い海岸線を有することから、景観の美しさや潮風の心地よさは屋外活動



写真1
雄大な風景を作り出している野菜畑



写真2
海岸線に並行しているサイクリングロード

に有効であると思われる。また冬も温暖で、寒さの厳しさが穏やかであることも、冬場の運動には有効である。

また、里山があり高低差が少なく、加えて広大な平地に花や野菜畑、果樹園、牧草地などが、北海道のような雄大な景観の特徴の1つである。（写真1）。

更に海岸線にある既存のサイクリングロードは渥美半島の海岸の美しさを堪能しながらサイクリングを楽しむことができる。これらからウォーキングやトレッキング、サイクリングやジョギングなど、屋外での運動を楽しむには適した環境であると感じた。（写真2）。

② ヒューマンリソースについて

健康寿命延伸に対する取り組みとして、市民がグループやサークルを形成して、ウォーキングなどを楽しんだり、ヨガやエアロビクスの講師と運動を実施したりと、多様な取り組みが始まっているとのことだった。

今後は医学部や保健学部の教員がリスク管理をおこないつながりながらより効果的、かつ持続的な取り組みへの提言をすることが、取り組むべき連携項目であると思われる。

また里山の自然を楽しみながらトレッキングツアーを主催している取り組みもあるとのことである。それにインターバルトレーニングやリスク管理の要素を加えるだけでなく、我々が実践しているポールウォーキングやノルディックウォーキング等、歩行の多様性を加えていくことが、その取り組みの楽しみの質、持続性などの魅力を高めることとなると考えられる。

考察とまとめ

田原市は、ウェルネスツーリズムの推進を杏林大学との連携で実施することになったが、現時点では、それぞれの観光資源を活かし、また我々の専門性を活かすため、地域貢献活動での経験を活かしてまずは関係者や地域住民の健康寿命延伸と介護予防、健康なライフスタイルの認識を深める必要がある。

それを礎として、観光客に日常生活の中での健康に対する意識付けや健康と運動に対する知識を深めるだけでなく、個々の運動機能や嗜好性に合わせて楽しみながら運動継続ができ、健康維持・増進に有効な運動の機会提供ができる観光地を目指せるような取り組みにしていきたい。

また、このような取り組みを通じて、今後は杏林大学の医学部、保健学部、外国語学部、総合政策学部の連携を深めることで、その特徴ある教育と研究の実施に発展させていきたいと考えている。

そして最終的にはこれらの取り組みの成果が、杏林大学の教育の魅力となることを願っている。

引用文献

- 1）小堀 貴亮、石井 博之、古本 泰之、他。
「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と実施およびその妥当性検証に関する研究。
2022年度地域総合研究所指定研究活動報告書
- 2）荒川 雅志、NPO日本スパ振興協会編著：
ウェルネスツーリズム～サードプレイスへの旅～、
フレグランスジャーナル社、2017。

地域総合研究所 指定研究活動 ⑧

にぎわい創出

特別な支援を必要とする
子どもの保育園における課題

■実施日：2023年 5 月～2024年 3 月
■担当者：石野 晶子 保健学部 看護学科 講師
場家美沙紀 保健学部 看護学科 学内講師

背 景

新生児医療の進歩はより多くの重症新生児の救命を可能にした。一方で日常的に特別支援を必要とする児が在宅で生活するようになった。特別支援の有無に関わらず乳幼児期の発達支援は重要であり、医療及び多様なニーズがある親子への地域での発達支援及び子育て支援が求められている。

目的及び意義

特別な支援が必要な乳幼児に対する保育体制、保育の実践における課題を提示し、特別な支援が必要な乳幼児の保育を実践する保育士のニーズを明確にすることである。また、保育により支援が必要な児と家族及び同一集団児の変化を検討することにより、特別な支援が必要な子に対する発達支援及び家族支援の在り方を提言することである。本調査から、児への発達支援に対するニーズのみならず、子育て上での特別な支援が必要な児と保護者に対する支援体制の希薄さや戸惑い、児を保育する上での保育士の不安や戸惑い、混乱の現状や要因を明示することが可能である。

結 果

調査① 保育体制の実態

●調査対象 15施設中10施設から回答。(内訳：園長 4 人・主任保育士 5 人・無回答 1 人)。回収率66.7%。
●各施設の保育数平均 常勤11.6人・非常勤（登録有）27.3 人。
●保育士平均年齢 40.9歳。
●保育経験
・病児保育経験有り保育士： 1 施設（保育士数 1 人）。
・障害保育経験有り保育士： 6 施設（保育士数各平均 17.4人）。

調査結果
●特別な支援を必要とする児
10施設全てに在籍。総数 54人（内訳は 0 歳 0 人、 1 歳 2 人、 2 歳 1 人、 3 歳15人、 4 歳17人、 5 歳19人）。

特別な支援が必要な児への支援には、医療的課題のみならず児への発達支援、保護者への子育て支援を多角的視点から捉えることが必要と考える。
本研究では、実際に乳幼児期にある特別な支援を必要とする児の保育を実践している保育者視点から、養育上の発育・発達支援の利点・課題に言及する。また、地域で育つ多様な発達支援を必要とする児と家族を支援する専門職を支える体制整備を含む、地域での子育て支援について提言する。

方 法

本研究では自治体による特別な支援が必要な乳幼児の保育体制の相違を把握するため、以下 2 調査を実施した。
調査① 目的は保育所における障害児保育体制、特別な支援が必要な児の保育実践の有無と内容把握、諸機関との連携体制に関する21項目を主とした実態調査。対象は、B市 15施設（公設公営10施設・公設民営 5 施設）の園長及び体制を把握している代表者15人。
調査② 目的は保育所勤務の保育士の特別な支援が必要な児の保育に対する認識、困難さ、保育士が必要とする支援等の13項目を主とした認識調査。対象は調査①を実施した園に勤務する保育士159人とした。
なお、本研究は、昨年A市で実施した調査と同様の調査（2 調査）をB市にて実施したものである。

●保育体制
「クラス担当保育士を複数配置しチームで保育」 9 施設（90.0%）
「対象児専任の保育士の配置」 1 施設（10.0%）
「加配」は10施設全てにおいて体制があり、配置されていた
「加配の職種」は「保育士」 9 施設（90.0%）
「介助アシスト」 2 施設（20.0%）
「看護師」 1 施設（10.0%）。重複回答あり
「看護師が配置されている施設」は 2 施設（20.0%）

●対応マニュアル
以下は、マニュアルが確立していた。
「食物アレルギー」 8 施設（80.0%）
「虐待・虐待疑い」 6 施設（60.0%）

「医療的ケア」 3 施設（30.0%）
「発達障害」「知的な遅れがある子」「脳性麻痺がある子」「気管支喘息」「てんかん」 各 1 施設（10.0%）

●個別の支援計画・指導計画：
〈支援計画作成〉
「作成している」が10施設中 9 施設（90.0%）
〈支援計画作成対象〉
「支援が必要な児全員」が 9 施設中 6 施設（66.7%）、「無回答」は 3 施設（33.3%）
〈支援計画作成者〉
「担任」は 9 施設中 7 施設（77.8%）、「担当保育士」は 1 施設（11.1%）
〈指導計画作成〉
「作成している」は10施設中 7 施設（70.0%）
〈指導計画作成対象〉
「支援が必要な児全員」が 7 施設中 6 施設（83.3%）、「無回答」は 1 施設（14.3%）
〈指導計画作成者〉
「担任」 7 施設中 6 施設（83.3%）
「担当保育士」 1 施設（14.3%）

調査② 保育士の認識

●調査対象 保育士159人中89人から回答を得た。回収率 56.0%。
●平均年齢 41.9歳。
●保育士歴平均 16.7年。
●特別支援が必要な児の保育経験有り 85人（95.5%）

調査結果
●特別支援が必要な児の状態 発達（発達障害含む）、アレルギ－、虐待（疑い含む）に関する内容が多かった。
●保育できて良かったと感じた 72人（84.7%）
〈内容〉 72人中69人から自由記述回答が得られた。
「子が成長する姿が見られ嬉しい」
「多様な知識を得ることができた」
「様々な子と関わることができた」
「周囲の子の関り方の変化を感じた」
「関連機関の支援の必要性を感じられた」
「保育を考える機会になった」
の 6 個の内容に大別できた。

●保育で困難を感じた 79人（92.9%）。困った時には97.5%の対象は相談しており、相談相手は「同僚保育士」「園長」が上位だった
〈困った内容〉
「適切な対応方法が分からない」
「集団での参加方法が分からない」
「専門知識が不足」
「クラス全体への影響」の 4 内容に大別できた。
〈困った時の解決策〉
79人中66人から自由記述回答が得られた。
「地域と連携・相談」
「相談し状況を共有する」
「皆で助け合って対応」
「その子らしく過ごせる方法を一緒に考えた」
の 4 個の内容に大別できた。

●医療保健ケア
上位は以下だった。
「健康状態の観察」10施設中 9 施設（90.0%）、
「経口薬の内服」「塗り薬の塗布」「絆創膏の貼付」「止血」が 8 施設（80.0%）
〈各ケアの主な実施者〉
「健康状態の観察」「絆創膏の貼付」「止血」は保育士、「経口薬の内服」は園長、「塗り薬の塗布」は園長・園長と保育士で実施していた。

●医療・保健・福祉・教育機関との連携
9 施設中 7 施設（77.7%）
〈連携時の連絡・調整役〉
7 施設中「園長」 5 施設（71.4%）
〈連携先〉 7 施設中「療育センター」 6 施設（85.7%）、「子ども家庭支援センター」「児童相談所」「小学校」 5 施設（71.4%）が上位だった。
〈具体的支援に関わる専門職〉
「医師」「作業療法士」 7 施設中 6 施設（85.7%）、「言語聴覚士」「小学校の先生」 5 施設（71.4%）が上位だった。

●保育で不安を感じた 78人（87.6%）。不安内容は、「医療的判断」「緊急時の対応」が上位だった。

●保育上で必要と考えること
上位 3 項目は、「担任の複数配置」「加配保育士の充実」「保護者との連携」だった。

●保育に関する考え
肯定的（43.8%）、否定的（3.4%）、どちらでもない（27.0%）、支援内容による（15.7%）
〈肯定的な理由〉
「子の成長を感じられる」「自分自身の経験になる」
「信頼関係が育まれる」「視点が広がる」
「その子の将来のため」「子どもを理解したい」
の 6 個の内容に大別できた。
〈否定的な理由〉
「専門的な知識が足りない」「疲弊しそう」という内容だった。
〈支援内容による理由〉
「経験・知識不足」「医療的ケアに対する不安」
の 2 個の内容に大別できた。

●保育士自身へのサポート
85人中66人から自由記述回答が得られた。
「じっくり関わることができる環境」「負担偏重の是正」
「様々な機関との連携」「充分な人員配置」
「園全体としての体制」「対象児から離れられる環境」
「周囲に相談しやすい環境」「研修・学習の場」
の 8 個の内容に大別できた。

現在、調査①②において上記結果を含む全結果を精査し、詳細を分析中である。

地域総合研究所 指定研究活動 ⑨

にぎわい創出

特別な支援を必要とする
子どもの学童保育における課題

■実施日：2023年 5 月～2024年 3 月
■担当者：石野 晶子 保健学部 看護学科 講師
場家美沙紀 保健学部 看護学科 学内講師

背 景

2017年に放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ。以下、学童保育と表記）が閣議決定され、特別支援の有無に関わらず、児童の放課後等の安全・安心な生活の場所の確保が図られている。

特に、学齢期以降の発達面において、「知的発達に遅れないが学習面、書く行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は小学校通常学級で6.5%」と報告されている。学童保育に通所する児童の多くは、通学する学校において特別支援の対象となっており、学校と学童保育所の連携及び児へ一貫した対応が求められている。

一方、学童保育における特別支援が必要な子に関する研究は少なく、学童保育における特別支援が必要な児の実態把握・子及び支援者が必要としている支援内容・学校及び関連機関との連携等、課題を明確にすることが求められている。

調査の結果

調査① 学童保育体制の実態

●調査対象 12施設中12施設から回答あり。
回収率 100%。
（管轄下である児童青少年課の責任者が総括して回答）
●各施設の学童保育指導員数平均 7.3人（常勤0人）
●保育士平均年齢 51.8歳
●保育経験 病児保育経験有り保育士、障害保育経験有り保育士各0施設。

調査結果

●特別な支援を必要とする児
12施設全てに在籍
総数52人（内訳：1年生35人、2年生10人、3年生4人、4年生3人）。52人中11人が加配あり児童。
子どもの特性は発達障害（69.2%）、診断名不明（19.2%）、先天性疾患（7.7%）。

目的及び意義

本研究では、特別支援を必要とする児に対する学童保育施設の受け入れ体制、学童保育支援員のニーズを明確にすることにより、学童保育の実践における課題を提示し、学童期以降の育児支援・発達支援及び学校との連携の在り方を提言するための一助とすることである

方法及び対象

特別な支援を必要とする児の学童保育施設での保育の現状や課題を把握するため、以下の2調査を実施した。

調査① 学童保育所における障害児保育体制、特別な支援が必要な児の保育実践の有無と内容把握、諸機関との連携体制に関する21項目を主とした実態調査を実施した。

対象として、A市の組織上、学童保育施設（12施設）を管轄下である児童青少年課の責任者に回答を依頼した。

調査② 学童保育所勤務の学童保育支援員・補助員の特別な支援が必要な児の保育に対する認識、困難さ、保育士が必要とする支援等の13項目を主とした認識調査を実施した。

対象は調査①を実施した園に勤務する学童保育支援員・補助員81人とした。

配慮・具体的内容は、個別支援（44.2%）、補助員1人配置（36.5%）が主だった。

●保育体制
担当を決めず複数の指導員がチームで保育 12施設（100%）。

●バックアップ体制・工夫
放課後児童健全育成事業による障害児の定義に該当し、保護者の申し出により「加配対応」。加配児童2人に対し支援員等1名配置。
上記に該当しない場合は複数の支援員・補助員が連携し対応。

●マニュアルの有無
虐待または疑いに対するマニュアル（自治体作成）のみ。
そのほか、保護者と児童青少年課による面談、就学支援シー

ト提出、「学校アレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」に準じた対応、主治医からの所見等を確認し、保護者・学童保育・児童青少年課で合意形成を図っていた。

●医療・保健に関するケア実施
「経口薬の内服」「気管支拡張剤テープの貼付」「血糖値の測定」「除去食の管理」「湿布の塗布」は児童が実施時の補佐だった。
一方、緊急時の対応は行政の職員が現場を訪問、保健師に判断を仰いでいた。

調査② 学童保育指導員の認識

●調査対象 学童保育指導員81人中71人から回答を得た。
回収率87.6%。
●平均年齢 59歳。
●学童保育指導員歴 平均7.0年

調査結果

●特別支援が必要な児の保育経験 有り64人（90.0%）

●特別支援が必要な児の状態
発達（発達障害含む）、アレルギー、虐待（疑い含む）に関する内容が多かった。

●保育でできて良かったと感じた
40人（62.5%）
具体的な内容は、「子どもの成長を感じた」「子と信頼関係ができた」「自分の勉強になった」「子どもが落ち着いた」「子どもの楽しそうな姿」の6内容に大別された。

●困難を感じた
60人（93.8%）
具体的な内容は、
「子どもへの対応方法が分からない」
「自分自身に支援が必要」
「子どもが自制できない」「子どもの問題言動」
「自分自身が危険に晒される」
「保護者の理解が得られない」
「周囲の子への影響」
「友達とのトラブルが発生する」
「必要な情報がない」の9個の内容に大別された。

●困った時の相談
・子どもの保育に対する相談をした：
60人中51人（85.0%）

まとめ

本研究の2調査から以下が示された。

- 学童指導員の9割は、特別な支援が必要な児の保育経験があった。一方、病児保育や障害児保育の経験はなく、学童保育での対応に困難を感じていた。
- 加配対応等のバックアップ体制はあるが、指導員はさらなる加配の充実や指導員の複数配置、学童保育所で困った時にいつでも気軽に相談できる体制構築を求めている。

●医療・保健・福祉・教育機関との連携
ケースにより連携していた。一方、小学校との連携では、「保護者の同意が得られず他機関と連携がとれない」「障害に関する内容・支援方法等に必要な専門知識が不十分」という声があった。

・保護者対応に対する相談をした
60人中29人（48.3%）
・子どもの保育に関する相談相手の上位は、同僚の指導員（92.9%）、市役所（27.5%）だった。
・保護者対応に関する上位は、同僚の指導員（58.6%）、市役所27.6%）だった。

●特別支援が必要な児への対応
不安あり：61人（85.9%）
不安の内容は、緊急時の対応（55.7%）、責任の所在（36.1%）、医療的な判断（34.4%）が上位だった。

●保育指導員が必要と考える支援
加配の充実（87.3%）、指導員の複数配置・保護者との連携（84.5%）、学童相談所内で気軽に相談できる体制（83.1%）が上位だった。

●特別支援が必要な子の保育に対する指導員の考え
肯定的16人（22.5%）、否定的8人（11.3%）、どちらでもない13人（18.3%）、支援内容による17人（23.9%）、わからない7人（9.9%）。
〈肯定的理由〉
「子どもの成長を感じられる」
「子どもの育ちを見守りたい」
「やりがいを感じる」
「子どもを理解し寄り添うことが大事」
「自分自身の学びになる」の5内容に大別された。
〈否定的理由〉
「知識不足・経験不足」「負担が大きい」の2内容に大別された。
〈支援内容による理由〉
「知識不足」「保育環境」「保護者との連携が難しい」「安全への配慮」「個別の対応法の有無」「自分の体力不足」の6内容に大別された。

3. 学童保育での子どもへの対応のみでなく保護者対応にも苦慮していることが示唆され、保護者の子どもに対する理解状況等を含めた保護者理解とともに保護者との連携を必要としていた。

現在、詳細を分析中である。引き続き、学童保育支援員のニーズを抽出し、特別な支援を必要とする児が学童保育上で安全・快適に過ごすことができる体制構築を検討していく。

災害に備える
まちづくり

COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
■担当者：齋藤 結香 保健学部 看護学科 助教
松浦 彰護 保健学部 看護学科 准教授
山崎 大翼 保健学部 臨床心理学科 助教

背景

災害発生または避難勧告発令等により、地域住民は学校・体育館や公民館等の公共施設の指定避難所（以下：避難所）で生活を送る。地域住民にとって避難所は、災害発生直後の一時的な生活の場であると同時に、生活再建と復興への第一歩を踏み出す重要な拠点になる。地域住民は、避難所で食料や生活必需品の供給支援や生活再建に向けた市町村等からの各種支援情報を得ることができる。

避難所における生活は、学校・体育館等や公民館が使用されるため、個人の生活スペースが狭く、食事や会話などの密接した場面が重なる。そして長時間にわたり同じ空間に滞在するため、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)などの感染症が蔓延しやすい。

実際に令和2年7月豪雨災害をはじめ、熱海市伊豆山土砂災害や能登半島地震においても、COVID-19感染拡大対策が重要視された。過去の災害でもノロウイルスやインフルエンザウイルスの集団発生事例が複数報告されている。このような避難所の感染症の集団発生リスクが生

活不活発病や災害関連死に繋がる可能性もある。

避難所生活の環境には多くの課題が残されている。COVID-19への対策を踏まえた避難所運営マニュアルなどの指針は示されたものの、地理的条件や人口構成などにより地域ごとに課題が異なり、どのように取り組むのかは、地域の自治体・住民組織に委ねられている。したがって、地域防災計画及び地区防災計画に基づき、地域や避難所ごとの具体的な現状と課題を明らかにした上で、継続的な避難所防災活動の改善に取り組むことが不可欠である。

本研究では、多職種が生活面・健康面・環境面の支援をより連携・協働して実践することにより、避難所生活者の健康リスクや災害関連死を予防し、生活の質の向上や健康の維持増進（改善されたヘルスケアアウトカム）に繋がると考える。また、WHO（2010）のFramework for Action on Interprofessional Education and Collaborative Practiceを基に図1に本研究の「避難所の連携・協働による防災活動の位置づけ」を示した。

今後30年のうちに、東南海地震や東京近郊の首都直下地震の発生確率が70%と高確率での発生が予測されており、人々は誰もが被災し避難所生活を送る可能性がある。そこで、本研究では首都圏のCOVID-19拡大禍の避難所における防災活動がどのように展開されているか探求し、COVID-19拡大禍の避難所防災活動のモデルを構築したいと考えた。

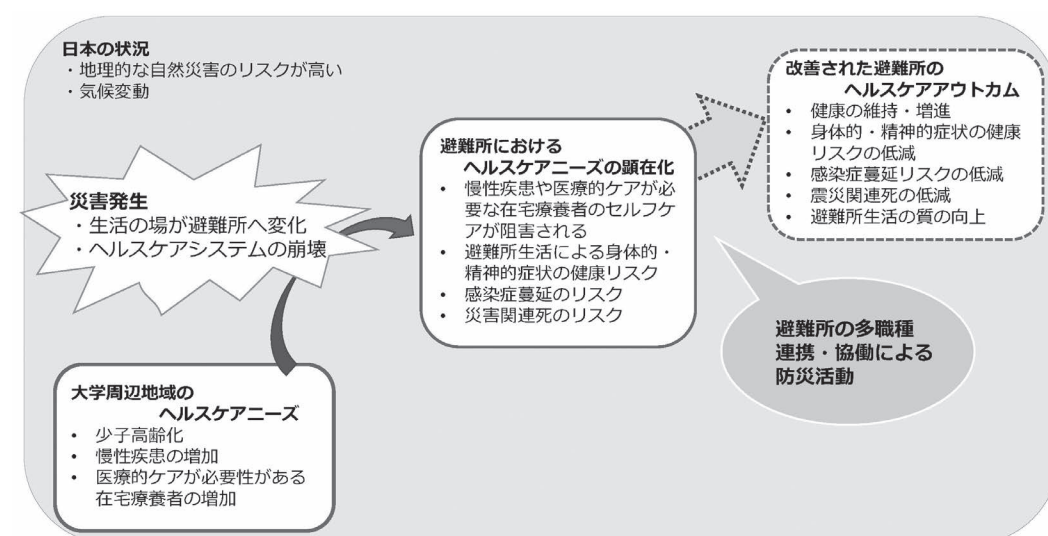


図1 避難所の連携・協働による防災活動の位置づけ

目的と意義

本研究の目的は、本大学周辺の複数地域におけるCOVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動を明らかにすることである。具体的に、下記の3点の目的と意義に挙げている。

① COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動における現状と課題を明らかにする。

COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動の標準化への一助に資することができる。避難所における防災活動をより効果的で効率的に行うため実践の重要な部分を見極め、良質な支援活動のための資料や、避難所運営ガイドライン等の指針の一部として示すことができる。

② COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動における連携・協働の現状と課題を明らかにする。

COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所防災活動における連携・協働の現状と課題が明らかになることで、より効果的で効率的な防災活動に資することができる。防災活動により、健康課題の悪化や感染症の集団発生リスクを低減し、災害関連死の削減に繋がる可能性がある。

③ COVID-19 感染拡大防止を踏まえた多職種連携・協働による避難所防災活動モデルを構築する。

支援者は、自らが被災しながらも支援を行わなければならない場合もあり、様々な心理的ストレスを抱える。COVID-19 感染拡大防止を踏まえた多職種連携・協働による避難所防災活動モデルを提示することにより、支援者の肉体的および時間的な負担を軽減し、二次的外傷性ストレスの危険性の減少等の精神的な支援を提供するための示唆を得ることができる。

実施内容

本研究では、まず文献検討によりCOVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所活動の課題を整理した。

先行研究から、過去の避難所運営時の感染拡大対策として、以下3つが実施されていた。

- ①病原体（感染源）への対策
- ②感染経路の遮断対策
- ③宿主の抵抗力向上対策

これらの対策について、実施主体別（被災者、避難運営スタッフ、市町村防災担当者、外部支援者等）の役割と具体的な取り組みをまとめた。地域住民による適切な防護具の着用、運営スタッフによる十分な換気とゾーニング、自治体による避難所数の確保など、多岐にわたる課題があることが明らかになった。

次に、避難所防災活動の運営等の実態を把握するため、フィールドワークを実施した。併せて、COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所運営について、インタビュー調査の実施が可能な自治体および関係者を探索した。

成果・達成状況

COVID-19感染拡大以降、避難所防災活動を経験した自治体が限られていたため、フィールドの選定に予定以上の時間を要し、進捗がやや遅れている。最終的に複数の避難所防災を実施している関係者からインタビュー調査の内諾を得ることができた。

今後の課題

本研究の成果は、今回の文献検討とフィールドワークを基にインタビュー調査の対象者の選定と、内諾を得たことである。達成状況はやや遅れているが、次年度にデータ収集、分析、研究発表を行う基盤ができたと考えており、COVID-19感染拡大防止を踏まえた避難所運営の実態と課題が一定程度明らかになることが期待される。

しかしながら、本研究には以下のような課題が残されている。

第一に、結果が一部の都市部に偏る可能性がある点である。地理的条件や人口構成の異なる地域においては、活動実態や課題が異なることが予測される。

第二に、COVID-19感染拡大対策のあり方が今後も経年的に変化することが予測される点である。定時的な調査では活動状況の変化を十分に把握できない可能性がある。

これらの課題を考慮しつつ、複数地域を対象に継続的な調査を実施していくことで、COVID-19感染拡大防止を踏まえた円滑な避難所の防災活動の実践の一助となると考える。

地域総合研究所 指定研究活動 ⑪

生きがい創出

地域在住高齢者に対する認知症予防の取り組み
— 農作業療法を用いて —

■実施日：2023年 8 月20日～2023年12月 3 日
■担当者：津曲 優子 保健学部 リハビリテーション学科 助教
青山 泉 保健学部 看護学科 講師

目的と意義

日本の高齢化率は年々高くなっており、認知症有病率は年齢とともに上昇するため、認知症者も増加することが予測される。認知症は早期発見と予防が重要であり、その予防方法として適度な運動、余暇活動、社会的参加、精神活動、認知訓練などがあげられる（「認知症疾患診療ガイドライン2017」から）。これらの要素を含みかつなじみのある作業として農作業があげられる。

地域在住高齢者の認知症予防に対する農作業療法の効果について、包括的かつ客観的に示す方法を検討することが本研究の目的である。最終的には、農作業療法のエビデンスを構築し、認知症の予防・進行予防と認知症者が地域で自分らしく暮らし続けるための一助となることであると考える。

認知症予防の取り組みの1つとしてこの農作業療法を実施し、その効果を検証した。

内 容

対象は静岡県藤枝市在住で身の回りの動作や家事、外出などは杖などを使用せずに自立している高齢者2名とした。事例1は60歳代女性で、事例2は70歳代女性、事例2は両膝痛と右手の痺れがあった。

方法は2023年8月20日～10月8日の週1回、計8回の農作業プログラムを実施した（表1）。

表1 1回のプログラムの流れ	
時間	内容
13：00～（10分）	体調などの確認・当日の内容の説明
13：10～（20分）	準備運動・作業準備
13：30～（15分）	農作業（前半）
13：45～（5分）	休憩
13：50～（45分）	農作業（後半）
14：35～（15分）	作業片付け・整理運動
14：50～（15分）	休憩・振り返り

農作業の内容はユーカリの収穫・加工（リース、スワッグ、ミルフィーユ、バスソルトなど）とし、プログラムの前半で収穫、後半で加工を実施することが多かった。また、加工した物をがんサバイバーに対し郵送の形でプレゼントし、お礼のメッセージを受け取る機会を1回設けた。

効果の検証のために、2023年8月20日（プログラム初回）、10月8日（プログラム期間終了時）、12月3日（プログラム終了から8週間後）の計3回、心身機能や心理状態、運動能力、生活に関する評価を実施し、プログラム実施期間とその後の非実施期間を比較した。研究の流れについては図1に示す。

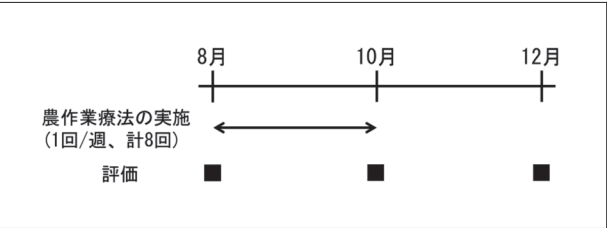


図1 研究プロトコル

結 果

2名とも8回中7回参加した。健康状態は良好で、途中で体調不良となることはなかった。また、畑などの不整地の移動やはさみや針などの使用も安全に行なえ、負傷することはなかった。作業中は途中会話をしながらも集中して行えており、作業効率も良かった。

事例1

プログラム実施前後の比較では、家事など生活に必要な動作については変化が見られなかったが、主観的な幸福感、開眼片足立ち（右）に向上がみられた。

プログラム終了時と8週間後の比較でも生活に必要な動作に変化はなかったが、右握力、開眼片足立ち（左右）、認知機能検査点数の向上がみられた。

対象者への報告会の際には「楽しかった。家族も喜んでくれた。やったことがないことをするというのが刺激になったのかな。健康維持のためにどこに意識しておけばいいか（片足立ち）が分かって継続していたのが良かったのかなと思う。」などの発言があった。

事例2

プログラム実施前後の比較では、転ばない自信と移動能力、開眼片足立ち（左右）、認知機能検査点数の向上がみられた。

プログラム終了時と8週間後の比較では、生活範囲が拡大（近隣の場所への外出頻度の増加）していた。プログラム実施時に向上が見られた移動能力と認知機能は維持できていたが、開眼片足立ち（両側）は低下がみられた。

対象者への報告会の際に「楽しかった。友だちからも欲しいと言われて（スワッグの）大きいのを小さく作り直してあげた。こういうのを私もやりたかったと言われたりもした。夫ともこういう検査があったとかこういうことをしたとか会話の内容が増えた。家でも計算の練習をしていた。」などの発言があった。

考 察

事例1のプログラム実施期間中の変化

主観的な幸福感、開眼片足立ち（右）に向上がみられた。主観的な幸福感の評価では特に心配事に関する項目で改善が見られており、農作業プログラムに参加することで前向きな気持ちで過ごすことが多くなったことが考えられる。また開眼片足立ちの向上は、農作業プログラム時に畑という不整地の移動や加工作業でも立位で行うなどの運動を実施したことでバランス能力が向上したことが考えられる。

また、プログラム終了から8週間後の評価では右握力、開眼片足立ち（左右）、認知機能検査点数の増加がみられた。事例1の発言からプログラム終了後も自主的に運動などを取り入れており、プログラムに参加したことが終了後も健康的に生活する意識づけの一助となったことが考えられる。

事例2のプログラム実施期間中の変化

転ばない自信と移動能力、開眼片足立ち（左右）、認知機能検査点数の向上がみられた。転ばない自信はバランス能力と相関があり、事例2はバランス能力の指標となる開眼片足立ちや移動能力の向上が見られていたため、それに



写真1 屋外での作業活動の様子

伴い自信も向上したことが考えられる。

また事例1と同様に農作業プログラムでの不整地の移動などがバランス能力の向上に寄与したことが考えられる。認知機能検査は、初回評価時に数字の記憶や計算で減点が見られていたが、プログラム終了時には改善されていた。これは農作業での加工作業時に工夫しながら取り組んでいたことに加え、普段から自宅でも認知機能トレーニングを取り入れていたとのことで、その影響も考えられる。

プログラム終了から8週間後の評価では、生活範囲が拡大していた。一方プログラム実施時に向上が見られた移動能力と認知機能は維持できていたが、開眼片足立ちは低下がみられた。

事例2の発言から事例2にとって健康維持のためには認知機能の維持・向上が重要であり、トレーニングは継続していたため、維持できていたが、運動機能は日常生活で困りごとではなく優先度としては低かったことが考えられる。また、農作業プログラムは事例2の日常生活活動より運動負荷が高いものであったことも示唆された。

以上のことから、農作業プログラムは人により効果のある項目は異なるものの、プログラムに参加したことで日常生活の中に認知症予防や運動能力の向上を目的とした新たなものを取り入れるきっかけとなり、プログラム終了後も継続して取り入れるという持続的な影響があることが示唆された。

教育的効果

学生は、初回の評価と農作業プログラムのサポート、最終評価のサポートと参加者への結果報告を実施した。

作業療法は対象者の健康と幸福を促進するために行われるものだが、専門職として根拠を持って実施することが重要である。

今回、実際に客観的な評価を実施し、それを対象者へフィードバックする機会を得て、対象者の反応も見ることができたため、対象者に客観的な評価を用いて効果を分かりやすいように説明する重要性について体感することができたのではないかと考えている。



写真2 屋内での作業活動の様子

災害に備える
まちづくり

多摩川流域における生物指標を用いた 氾濫リスクモニタリング手法の開発

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日
■担当者：橋本 晃生
データサイエンス教育研究センター 助教
坪下 幸寛
データサイエンス教育研究センター 教授

背景と目的

気候変動により世界各地で河川の氾濫リスクが高まっている。氾濫は人々の暮らしだけでなく、水辺に生息する生物の姿かたちや行動の進化に大きく影響する。環境の変化に応じて生物集団中の表現型が変化することを表現型可塑性といい、そのような性質をもつ表現型は、環境変化に対するセンサーになりうる。

氾濫原の砂礫地に生息する昆虫にイッカク類（甲虫目：アリモドキ科）がいる。イッカク類の一種であるツノボンチビイッカク（以下、イッカク）には二型を示す種があり、飛翔するために翅（はね）が発達している個体（長翅型）と、翅が退縮して短い個体（短翅型）を生じる。

その二型それぞれの割合は季節的に変動する。イッカクは冬期を除いて発生するが、特に、氾濫の起きやすい夏季に近づくにつれて集団中に占める長翅個体の割合は高くなる。このことは、氾濫を飛翔によって回避して生き延びるための適応戦略の1つである可能性が示されてきた。

本研究では、この仮説を検証することに加え、河川の氾濫リスクの指標としての翅形態の有用性を検討する。

課題と意義

- 本研究課題は、多摩川水系において、
- ①水位変動の小さな上流域から大きな下流域まで、様々なイッカク個体群の長翅率の変異を明らかにし、
 - ②捕獲地点付近の水位データとの関連性を検討する。
- さらに
- ③どのような環境の砂州（植生・地質等）にイッカクが多く生息するか調べた上で、
 - ④洪水リスクの生物指標としての利用を見据え、画像を用いた翅型の自動判別AIを完成させる。以上により、昆虫による河川の氾濫リスク評価手法の基盤構築を行う。
- これまでの水文学や河川工学による氾濫リスク予測の多くは水位観測所のデータに基づくため、観測所から離れた

砂州やその近隣地域の予測ほど不確実になる。本研究による評価法が完成すると、個々の砂州にイッカク類が生息していれば、近くに観測所がない流域の砂州上であっても浸水リスクを評価できる可能性がある。

また、令和元年東日本台風による多摩川氾濫以降、東京都下では、「多摩川緊急治水対策プロジェクト」が各自治体で進められている。身近な昆虫を材料とする本研究は、そこで掲げられる「事前の準備と適切な避難行動がとれるように市民一人ひとりの避難行動計画の策定を推進」するための普及啓発に向けた理科教育活動等にも応用可能である。

実施内容

1）翅型の地域変異の解明

一般に、河川は下流にいくほど支流からの合流により水位変動が大きくなる。多摩川（東京都）において、水位変動の程度が異なる上・中・下流の各地点でイッカク類を誘引する罠で採集し、各翅型の頻度を調査地間で比較する。各地点、概ね春・夏の2回を目安に調査を実施した（図1 a, b）。



図1-a 調査地で見られたツノボンチビイッカク



図1-b 上流にある調査地付近の風景（東京都青梅市）

2）生息地選好性の解明

イッカクの生息環境の選好性を明らかにするため、下流域の調査地に一定の大きさの区画を複数設定し（コドラート法）、区画内に罠を仕掛けて採集した。並行して区画内

の植生等の環境データを取得し、イッカクの採集数等との関係性を探索的に分析するためのデータを収集した（図1 c, d）。



図1-c コドラート法による植生調査の1区画



図1-d 地表面の状態を画像に記録する様子

3）翅型の画像識別手法の検討

イッカクは体長2 mm前後と微小で、飛翔のための翅（後翅）は上翅下に収納されて隠れるため外見上見えない。本研究では、長翅と短翅の外見における微妙な差異を区別する画像AIを構築し、両者の外見による識別法の確立を目指すため、上記（1）（2）により得られたサンプルの写真撮影を行った。

結果

1）翅型の地域変異の解明

東京都内の流域の異なる3地点（青梅市、昭島市、大田区）において、落とし穴式の罠を利用した昆虫類の採集を実施した。すべての地点で多数のイッカクが採集された。

2）生息地選好性の解明

下流域（東京都大田区）の1地点において、2回の植生調査を行った（研究協力：山本薫博士（横須賀市自然・人文博物館）、中山博子氏（神奈川県植物誌調査会））。計60区画（30区画/回）について、生育する植物の種・株数等を記録した。集計の結果、約80種の植物が記録された（表1）。さらに、各区画内の地表面の砂礫の状態を写真撮影した。

3）翅型の画像識別手法の検討

上記の調査により得られたイッカクのサンプルから乾燥標本を作製し、撮影条件を検討の上、写真撮影し多数の鮮明な画像が得られた（図2）。

達成状況

多摩川流域の広域調査では、計画通りに調査地点数を増

表1 イッカクの生息地で確認された植物種一覧（抜粋）
2023年4～9月に下流域（大田区）の氾濫原にて観察された、株数の多い植物上位20種（株数・種名（和名）順）

種名（和名）	種名（学名）	株数
ホンバイヌタデ	Persicaria trigonocarpum (Makino) Nakai	133
メヒシバ	Digitaria ciliaris (Retz.) Koeler	114
シロザ	Chenopodium album L.	71
ネズミホソムギ	Lolium x hybridum Hausskn.	49
ヨモギ	Artemisia indica Willd. var. maximowiczii (Nakai) H.Hara	35
イヌムギ	Bromus unioloides Humb.	25
オオイヌタデ	Persicaria lapathifolia (L.) Gray	25
コマツヨイグサ	Oenothera laciniata Hill	21
ヨシ	Phragmites australis (Cav.) Trin. ex Steud.	20
アリタソウ	Chenopodium ambrosioides L.	14
カラスムギ	Avena fatua L.	14
ヒロハホウキギク	Aster subulatus Michx. var. subulatus	14
アメリカフウロ	Geranium carolinianum L.	13
ナガミヒナゲシ	Papaver dubium L.	13
ヤハズエンドウ	Vicia angustifolia L. var. segetalis (Thuill.) Koch.	13
カラシナ	Brassica juncea (L.) Czern.	12
ヤエムグラ	Galium spurium L. var. echinospermum (Wallr.) Hayek	12
ナヨクサフジ	Vicia dasycarpa Ten.	10
イヌコハコベ	Stellaria pallida (Dumort.) Pire	9
カナムグラ	Humulus japonicus Siebold et Zucc.	9



図2 翅型識別AI構築用の学習用標本画像（抜粋）
イッカクの乾燥標本を、デジタルカメラのマクロ機能・深度合成機能を使用して背面から撮影

やした。今後、既調査地間にある未調査地においてもサンプリングを実施したい。また、これまでの調査で得られている標本を含めて形態計測・データ解析を進め、河川の氾濫動態と翅型の切り替えの関係性について検証を続ける。

イッカク類は生活史が不明な部分の多い昆虫である。生息環境調査は年変動も考慮して次年度以降も継続することで、より詳細な微環境への選好性を明らかにできるだろう。翅型の識別手法については、画像データを順調に蓄積している。今年度は撮影方法の見直しも行い、AIによる翅型識別モデル構築へ向け、より効率的に画像データを得られるようになった。

今後、さらなる観察によって氾濫原の環境動態と昆虫の形態・行動との関係の全貌を明らかにしたい。

社会貢献活動（特定活動）

杏林大学では、地域社会へ向けて各種の市民講座・講演会、ボランティア活動、教育活動などの社会貢献活動を行っています。その中でも、COC事業のテーマに関連して推進する活動や自治体からの依頼や斡旋を通じた活動、ならびに産業界との協定に基づく社会貢献活動を「特定活動」としています。

地域における社会貢献活動 ①

特定活動

BLS指導を通した実践的な災害対応能力の向上と共助精神の涵養

- 実施日：2023年6月16日～2024年2月18日
- 担当者：宮野 収 保健学部 救急救命学科 特任教授
滝沢 文彦 保健学部 救急救命学科 特任准教授

目 的

本活動はBLS指導を行うことにより、「三鷹市民の実践的災害対応力の向上」及び協定を結んでいる羽村市の中学生への指導を通して「活力ある地域社会の創造に資する」ことを目的としている。また、三鷹市民駅伝大会において傷病者発生時における救護活動を行い、「地域密着型の社会貢献活動を行う」ことも目的としている。

学生への教育効果としては、ボランティアとして参加することによる社会貢献意識の醸成、大学の授業で学んだ救急救命処置の知識・技術を救護活動に反映させるとともに、応急手当普及員の資格を活かし実践的なBLS指導を行うことで、指導技能の向上を図ることができる。

さらに、様々な年齢層の市民と接する事で参加学生のコミュニケーション能力の向上が期待できる。

活動内容

1 「羽村市内の中学生」に対するBLS指導

実施日：2023年6月16日（金）

参加者：救急救命学科学生50名、教員9名

対象中学生：中学2年生延べ472名

羽村市と杏林大学は、相互の資源及び研究成果等の交流を促進し、活力ある地域社会の創造、人材育成及び両者の発展に資することを目的とし、教育、生涯学習、学術研究等の連携に関する協定を結んでいる。このことから、羽村市教育委員会からの依頼により当学科の3年生が羽村市内の中学2年生に対するBLS指導を毎年行っているものである。

本活動は、本学学生1～2名が1つの班（中学生18～20名）を担当し、それぞれの学生が責任を持って指導にあたった。中学生同士がチームを組み、訓練人形やAEDを使った一次救命処置以外に、テニスボールを使った胸骨圧迫を行うなど、飽きさせずに真剣に取り組ませるよう事前に研究して、効果の挙がる指導を実施した。

2 「三鷹市総合防災訓練」で市民に対するBLS指導

実施日：2023年11月5日（日）

参加者：救急救命学科ボランティア学生4名、教員1名

本学ボランティア学生は、三鷹消防署員とともに、応急手当体験コーナーにおいて心肺蘇生訓練用人形、訓練用AEDを使用して、実技を主体とした実践的な指導を実施した。

当日は約200名が当コーナーに立ち寄り、応急救護体験をした。来場者は若年者から高齢者まで幅広い年齢層の市民であり、それぞれの対象者に応じて、言動に配慮した指導を行った。体験した市民からも「親切な対応であった、質問に分かり易く応えてくれた」といった言葉が聞かれるなど好評であった。

3 「三鷹市内の中学生」に対する消防職員との協働によるBLS指導

実施日：2024年2月5日（月）、6日（火）

三鷹市立第6中学校

参加者：救急救命学科ボランティア学生延べ12名、
教員2名

対象中学生：中学1年生延べ150名

三鷹市では市内の中学生に対し普通救命講習を実施しており、その指導を三鷹消防署員と連携しながら実施した。対象中学生は、比較的年齢の近い本学学生が指導してくれることに對し、親近感を持って取り組んでいた。

また、中学校教員からも本学学生の懇切丁寧な指導に對し、好評を得ている活動である。

4 「第32回三鷹市民駅伝大会」における救護所担当

実施日：2024年2月18日（日）

参加者：救急救命学科ボランティア学生8名、教員5名
本市民駅伝大会は例年秋に実施されているが、今年度はこの時期の開催になった。今回は161チーム805名が走者と

して参加、総観客数は約1万4千人という大規模な行事であった。

こうした中で本学ボランティア学生は市内の駅伝コース4カ所に設置された救護所で待機し、医師、保健師及び三鷹消防署員と連携しながら傷病者発生時に備えた救護所担当として活動した。けが人は2名発生したが、擦り傷程度の軽症であった。

AEDの取り扱いや応急処置要領について学んでいる当大学の学生が救護所に配置されていることで、参加している市民から安心感を持たれている。

地域における社会貢献活動 ②

特定活動

三鷹市における健幸教室の開催

- 実施日：2023年7月8日、10月7日、12月2日、
2024年2月10日
- 担当者：榎本 雪絵 保健学部 リハビリテーション学科 准教授
辻 謙作 体笑会

目 的

この活動は、三鷹市在住高齢者の健康増進および健康寿命の延伸、三鷹市における自主グループ支援、理学療法学専攻学生の教育、地域交流・他世代交流の促進を目的に、2016年から継続して実施している。今年度も年4回（7月、10月、12月、2月）、理学療法学専攻の学生ボランティアと自主グループ体笑会の協力のもと実施した。

活動内容

健幸教室の開催は、三鷹市の広報誌「広報みたか」の掲示板で案内し、参加者を公募した。コロナ禍以降、参加募集人数は20名に制限し、参加者はメールにて申し込みを行う。2023年度の参加者数は延べ72名、リピーターの方は84%であった。

健幸教室当日は、受付で資料（体調チェック票、体力測定結果票、アンケートなど）と名札を渡し、受付後に問診とバイタル（血圧・脈拍）測定を実施した。なお、参加者にはマスク着用と手指消毒をお願いした。

参加者には、握力（筋力の指標）とファンクショナルリーチテスト（バランスの指標）を実施した。体力測定票には年代別の平均値を表記し、自身と比較できるようにした。また、継続している参加者には、以前に実施した体力測定結果を示し、自身の変化を確認できるようにした。

この健幸教室の運動は持続的にゆっくり行うストレッチ

（スタティクストレッチ）と反復運動（ダイナミックストレッチ）を組み合わせたプログラムでテーマを決めて行った。参加者は体笑会のメンバーと休憩を含め90分程度実施した。

〈運動プログラム〉

2023年7月8日：「全身くまなく伸ばしましょう」
10月7日：「全身くまなく伸ばしましょう」
12月2日：「猫背を解消！」
2024年2月10日：「立位バランスの改善！」

活動結果

アンケート調査の結果は次のとおりである。

- 参加者の年齢
60～65歳 …………… 1名（2%）
66～70歳 …………… 13名（22%）
71～75歳 …………… 14名（23%）
76～80歳 …………… 7名（12%）
81～85歳 …………… 14名（23%）
86歳以上 …………… 11名（18%）
- 性別
男性 …………… 26名（43%）
女性 …………… 35名（57%）
他の地域と比較して男性参加者が多い傾向にあった。
- 就労状況
52名（90%）が就労していなかった。
- 外出頻度
「毎日」 …………… 34名（59%）
「2～3日に1回程度」 … 21名（36%）
「週に1回程度」 …………… 2名（3%）
「1か月に2～3回程度」 1名（2%）
この結果を見ると外出頻度は高いと思われた。
- 運動頻度
「毎日」 …………… 21名（35%）
「2～3日に2回程度」 … 20名（34%）
「週1回程度」 …………… 14名（24%）
「1か月に2～3回程度」 1名（2%）
「運動はしていない」 …… 3名（5%）
この結果から運動習慣が高いと思われた。





●教室の参加満足度

「とても満足」……52名（91％）
「まあまあ満足」……5名（9％）
満足度は高いと思われた。

●教室への参加回数

「初めて」……9名（15％）
「2回目」……4名（7％）
「3回目」……5名（9％）
「4回以上」……40名（69％）
繰り返し参加している方が多かった。

●活動の新規参加者

友人や家族の誘いが参加契機になっているが、その後の継続参加につながっているのは、リピーターが多いながらも新規参加者を受け入れやすい雰囲気や、担当制で学生ボランティアの対応があることが要因として考えられた。

学生への教育的効果

この活動には毎回、10～15名の理学療法学専攻2～4年生の学生がボランティアとして参加している。学生は会場設営や誘導、バイタル測定、体力測定、運動指導を実施した。バイタル測定は、病院実習などを経験した3、4年生が担当し、必要に応じて教員が対応、参加可否を判断した。運動指導では1名の学生が1～2名の参加者を担当し、転倒予防などに配慮しながら、姿勢やフォームなど運動指導を行った。

この活動は、病院や施設において実施される患者との対応につながるため、様々な参加者に関わる経験を得ることは貴重な学びの機会となっていると思われる。

また、学生は参加者からの評判がとてもよく、「学生さんが優しく、丁寧に教えてくれるからとてもうれしいし、わかりやすい」など、参加者から直接感謝の言葉がかけられるため、理学療法士となる動機や向学心の向上、将来の理学療法士像の形成などにも寄与しているのではないかと思われた。

地域における社会貢献活動 ③

特定活動

「生涯スポーツの機会提供」プログラム

■実施日：2023年4月1日～2024年3月31日

■担当者：相原 圭太 保健学部 リハビリテーション学科 助教
石井 博之 保健学部 リハビリテーション学科 教授
地域連携センター センター長
楠田 美奈 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

本プログラムは運動を日常生活で無理せずに継続することで健康寿命延伸をはかるための支援を目的としている。プログラムは文部科学省作成の新体力実施要項に基づいた運動機能の評価、及び、地域在住中高齢者の生活環境・嗜好・健康状態を聴取することで、個々人の状態に応じたオーダーメイドの運動指導を行っている。

加えて、運動の多様性を提供し、日々の運動負荷量をより適正に設定できるようになることを目的に、年2回「歩き方教室」と題して、個別の適正負荷量を設定した上でボールウォーキングとノルディックウォーキングの体験会及び心拍トレーニング講座を行っている。

これらのプログラムは羽村市福祉健康部健康課、および羽村市教育委員会生涯学習部スポーツ推進課と協同で実施している。

活動内容

2023年度のプログラムは、最低限の感染対策は継続しつつも、測定項目や参加人数に関する制限を撤廃し、コロナ禍前と同様のプログラム内容を実施した。

参加者の多くはコロナ禍において健康の大切さに気づき、健康づくりのために運動を開始した者など、健康に対する意識が高まっている。健康意識に関しては、コロナ禍では感染予防が中心であったが、5類移行後は健康への意識がより一層高まり、健康増進に積極的に取り組みたいという意識の変化がみられた。

このような参加者の意識の変化に対して、運動機能評価や体組成測定を通じて、参加者が自身の身体状況を可視化し、定期的な測定や結果につ

いてのフィードバックを行うことは、モチベーションの向上にもつながり、運動習慣の継続を促進すると考えられる。また、参加者が増えたことで、互いの測定の様子を称え合いながら進行之し、活気あふれる活動となっている。これらは、身体活動や運動実施に対する影響だけでなく、



表1 2023年度活動実績

月日	参加者(人)	教員(人)	学生(人)	活動実施場所	備考
6月10日	18	3	1	S&Dスポーツアリーナ羽村	体力測定会・相談会
8月19日	13	3	5	S&Dスポーツアリーナ羽村	体力測定会・相談会
12月10日	約60	1	0	生涯学習センターゆとろぎ	はむら健康フェア
12月16日	9	3	3	S&Dスポーツアリーナ羽村	体力測定会・相談会
2月10日	15	2	1	S&Dスポーツアリーナ羽村	体力測定会・相談会
2月3日	11	1	0	S&Dスポーツアリーナ羽村	歩き方教室
2月17日	11	1	0	S&Dスポーツアリーナ羽村	歩き方教室

社会とのつながりの構築にも貢献している。

その一方で、コロナ禍によって運動をやめてしまった者や体力低下が著しい者などが一部おり、健康格差も存在している。これ以上の健康格差を防ぐためにも、本プログラムのような個別ニーズに対応したサポートや、モチベーション向上のための継続した取り組みを行うことで、地域全体の健康増進に寄与したい。

今後の展開

本プログラムの開始から9年が経過して我々の活動が着実に地域に浸透し、体力・運動機能の再評価に訪れる者も

多くなっている。

参加者は中・高強度の運動を習慣的に行なっている者から、膝痛や腰痛を抱え低強度の運動を実施することすらままならない者など様々である。

コロナ禍を経て、健康意識の高まりを感じる一方で、健康格差の存在も確認されており、参加者の多様なニーズに柔軟に対応することが求められる。そのためには、本プログラムへの参加を契機として、羽村市の既存コミュニティ、プログラムを活用することや羽村市健康課・スポーツ推進課とさらなる連携強化等を図ることで、市民のニーズに応じたより適切な支援を提供していきたい。

地域における社会貢献活動 ④

特定活動

多胎育児支援活動

■実施日：2023年6月～2024年3月

■担当者：場家美沙紀 保健学部 看護学科 学内講師
佐々木裕子 保健学部 看護学科 教授
鈴木 朋子 保健学部 看護学科 学内講師
長谷川和子 保健学部 看護学科 学内講師
山内 亮子 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

多胎育児中の保護者は、同時に複数の子どもを育てる中で、睡眠不足や疲労、育児期の外出困難な状況や多胎育児情報の入手の困難さなどから、孤立感や育児不安感を有している。

本活動は、多胎妊娠中の妊婦とその家族及び多胎育児中の家族が、①多胎妊娠・出産・育児に関する情報を得ること、②多胎育児特有の不安や問題を解決する機会を得ること、③保護者同士の交流の場を提供することを目的とした。

活動内容

活動Ⅰ 多胎育児準備クラス

- 1 対象者：多胎妊娠中の妊婦とご家族
- 2 活動日時：1回2日間コース（10:00～12:00）、年3回

第1回 2023年6月10日(土)、17日(土)

第2回 2023年9月16日(土)、28日(土)

第3回 2024年1月20日(土)、27日(土)

3 プログラムおよび活動方法

オンライン開催

1日目 講義「多胎妊娠・出産の基礎知識」

杏林大学医学部付属病院産科医師

講話「先輩ママパパの体験談」

2日目 講義「多胎妊娠から育児期までの生活」

杏林大学医学部付属病院助産師

GW「先輩ママパパとの情報交換」

4 参加者

全3回で多胎妊娠中の妊婦およびそのご家族計34組、多胎育児中の先輩保護者13名が参加した。なお各回到教員2～3名、付属病院医師1名、助産師3～4名が参加した。

5 多胎育児準備クラスを通して

医師や助産師の講義は、専門的な知識や助言を得る機会となり、体験談講話や少人数での情報交換会は、多胎育児経験者ならではの情報や助言を得る機会となった。

また、オンライン開催により、移動の負担が大きい参加者や遠方からの参加もあった。さらに、希望者へのオンデマンド配信により、管理入院中の妊婦や仕事



等でリアルタイム参加が難しいパートナーにも後日講義や体験談の視聴が可能となり好評であった。

活動Ⅱ ツインズマーケット

- 対象者**：多胎妊娠中及び育児中のご家族
- 開催日**：2024年3月2日（土） 13:00～16:00
- プログラムおよび活動方法**
第一部講演会のみ、事前申込者に対しオンデマンド配信実施
第1部 講演会「お楽しみ」
講師：嘶家 柳亭こみち氏
第2部 情報交換会（フリートーク）
- 参加者**
〈対面参加〉
 - ・**講演会**：多胎妊娠中及び育児中の家族14組22名（うち9組が初参加）。対面参加者の子どもの年齢は0～13歳。多摩地域のほか東京23区内からの参加もあった。
 - ・**情報交換会（フリートーク）**：多胎妊娠中及び育児中の家族10組15名
 - ・**その他の参加者**：杏林大学教員5名、杏林大学学生29名、その他4名〈オンデマンド視聴〉多胎妊娠育児中の家族6組
- 講演会「お楽しみ」**
「二児の母として落語会初の実打昇進」を成し遂げた

地域における社会貢献活動 ⑤

特定活動

幼児期の親子を対象とした性の多様性に対応したシナリオによる「いのちのおはなし会」の実践

- 実施日：2023年5月1日～2024年3月31日
- 担当者：佐々木裕子 保健学部 看護学科 教授
藤田 千春 保健学部 看護学科 教授
長谷川和子 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

「いのちのおはなし会」（以下、おはなし会）は、幼児期（4・5歳児）の子どもと保護者を対象とした性教育であり、

ご自身のエピソードを交えた楽しいお話と、多胎育児の醍醐味を踏まえた古典落語を披露いただいた。

6 情報交換会（フリートーク）

3グループに分かれて情報交換を行った。ママグループでは、きょうだい児との関わり方、妊娠中に準備しておくこと、保育園のこと等、パパグループでは、ママの精神的支援や自身の仕事と育児の両立等が話題となり、日頃の子育ての悩みや疑問を共有し、参加者同士が支え合う時間となった。

7 ツインズマーケットを通して

本活動は4年ぶりの対面開催であった。講演会は「励みになった」と好評であった。情報交換会（フリートーク）では、保護者同士の日頃の悩みを共有し、先輩保護者のアドバイスを得た。オンライン上では制限されがちな保護者同士の交流の場を実現でき、お互いの顔を直接見て交流する重要性を改めて実感する機会となった。

一方、妊娠中の参加者の相談や不安解消が主となりがちで、現在子育て中の参加者が抱える悩みを十分に共有する時間が不足した。情報交換のテーマ設定やグループの振り分け、ファシリテートの難しさが課題となった。

まとめ

本活動を通し、多胎妊娠育児中の家族に対し、多胎妊娠・出産・育児に特化した専門的知識、多胎育児特有の不安や悩みを解決に導く機会を提供することができた。

また、当日の運営補助及び保育を担った学生にとっても、子育ての大変さを実感し、子どもについて理解を深める場として寄与したと考えられる。今後も多胎家庭同士の繋がりを深め、育児の孤立を防ぐことができるよう活動を継続していきたい。

性に関する質問に向き合い教育的関わりを考える機会となることである。

活動内容

おはなし会は、プログラムに基づき2部構成とし、【第1部】は学生によるパネルシアターとエプロンシアターによるいのちの誕生、出産、男女の体のちがい、プライベートゾーン、多様な心の性の寸劇を行った（30分）。【第2部】は、胎児人形の抱っこ体験と教員主導での保護者・学生・保育園職員との振り返りを行った（15分）。おはなし会に参加した保護者には、おはなし会の趣旨と内容をまとめたリーフレットと、子どもの性の疑問に対する答え方の原則と子どもから多く聞かれる質問と回答例を記載したパンフレットを配布した。

活動結果

今年度の活動は、8月と3月に保育園11園で実施した。おはなし会に参加した子どもは総数247名、保護者20名であり、活動に参加した学生は11名（延べ44名）であった。

〈子どもたちの反応〉

命の始まりから赤ちゃんの誕生までを実物大の胎児パネルと人形で説明するシーンでは、パネルをめくる度に歓声上がり、赤ちゃん誕生の場面では“頑張れ！”と声出して母親を応援する姿が見られた。

プライベートゾーンという言葉は子ども達に浸透しており、自分の体を守るために洋服を着ることや清潔にすること、見られたり触られたりすることが嫌なときは“やめて！”と意思表示することが理解できたようであった。

胎児人形を抱く際は、大きさと重さを実感しながら両手で優しく抱っこできていた。

〈保護者の反応〉

性の多様性を色違いのハートの模型で表現し、好きなものや好きな人が違ってよいことを伝えたが、よかったと反応がある一方で子ども達が心の性を理解するには表現が難

表1 活動の概要

保育園	実施日時	参加者（人）			
		子ども	保護者	保育士	学生
A	8月9日午前	30	2	6	4
B	8月10日午前	20	0	6	4
C	8月10日午後	25	0	4	4
D	3月4日午前	23	7	4	4
E	3月4日午後	18	4	6	4
F	3月5日午前	21	2	4	4
G	3月5日午後	23	0	4	4
H	3月7日午前	22	0	2	4
I	3月7日午後	25	0	3	4
J	3月8日午前	17	0	5	4
K	3月8日午後	23	5	4	4



しいといった意見もあった。

また、家庭で子どもから身体や性に関する質問に困っている保護者が見受けられ、対応を外部に求める声があった。配布したパンフレットについては、これから家庭で活用したいとの声があった。

学生への教育的効果

学生のレポートには、主に①幼児、②保護者、③性教育についての記載があった。

①幼児に対しては、子どもたちが真剣に話を聞き、質問にも元気に答えてくれ、予想以上におはなし会を楽しんでくれた、幼児期から正しい知識を持てるように関わることで性の正しい捉え方に繋がるのではないかといった感想があった。

②保護者に対しては、4歳から性教育を始めるのは早いと思っている家庭では子どもの理解度に差が出るのではないかと、子どもに何から話せばよいかわからないと思っている保護者が今後子どもと話をするきっかけになればよい、保護者の要望に合うように内容を検討する必要がある、などの感想があった。

③性教育については、性教育とは性格や考え方、愛情や思いやりなど人と人との関わりを含む多くの意味合いをもつことを学んだ、4歳児は性差に気づき興味の出る時期であり、その年齢に適した内容を保育園で学ぶことの重要性を知った、などが挙げられた。

これらのことから、「幼児期からの性教育の意義」、幼児を持つ保護者への「性教育の課題」、「家庭でのいのちや身体、性についてのコミュニケーションの大切さ」、性教育とは何か」等について考え、気づく機会になったと考えられる。

まとめ

コロナ禍前の頻度で対面での「おはなし会」が実施でき、多くの子どもたちに「おはなし会」のメッセージを届けることができた。

保育園側からは子どもにわかりやすい言葉で命の大切さや自分の体を守ることが伝えられている、心の性をシナリオに加えるなど、時代のニーズに即した「おはなし会」に進化しているなどの肯定的な声が多数聞かれた。

今後も学生と共に幼児と保護者に向けたのおはなし会の内容を改良し、実践していきたい。

特定活動

花と迎える年末年始

■実施日：2023年12月1日～2024年1月5日
 ■担当者：楠田 美奈 保健学部 看護学科 学内講師
 木村 尚未 華道家元池坊中央委員 副総華督
 東京都立六本木高等学校 非常勤講師

目 的

杏林大学では、2016年からアトレヴィ三鷹との連携事業として年末年始にお花の作品展示を実施している。参加する学生の『コミュニケーションスキルを育む』こと、『モチベーションの向上』の2点を活動の目的としている。

三鷹駅利用者に日本の伝統文化を楽しんでいただくと同時に、一般企業との事前準備・調整作業を通して学生の社会性やマナー意識を養う機会とする。

活動内容

実 施 場 所：杏林大学井の頭キャンパス、
 JR三鷹駅内アトレヴィ三鷹

本学参加者：7名（保健学部7名。うち4年1名、2年1名、1年5名）

①プレゼンテーション（複数回）

2023年9月末より、オンラインでアトレヴィ三鷹担当者との打ち合わせを実施した。今回の作品テーマを『ぬくもり』にし、卯年から辰年への上り調子に肖りつつ、温かみのある色の花を使って、『ぬくもり』を表現したいと提案し、アトレヴィ三鷹側からも承諾を得た。



竹の加工中（竹にはオリーブオイルを塗布。竹の葉には『ももの花』というハンドクリームを塗布）

②展示準備・学内作業

12月から本格的に準備を開始し、作品の重要な部分を占める『竹』を採取するために、松田理事長をはじめ造園業者の皆様の協力のもと、27日に八王子キャンパスで竹を準備、同日に井の頭キャンパスに戻り竹の加工（色保持のための油脂塗布）を行った。28日午前には、竹を切る・割る・組み合わせて、作品をある程度組み立てる作業を行った。

③展示・設置期間

28日午後、昨年度同様、作品を制作・展示した。「花を生ける様子をご覧くださいませ」という“ポップ”をアトレヴィ三鷹に用意していただき掲示し、学生は常に「見られている」なかで作品制作を行った。

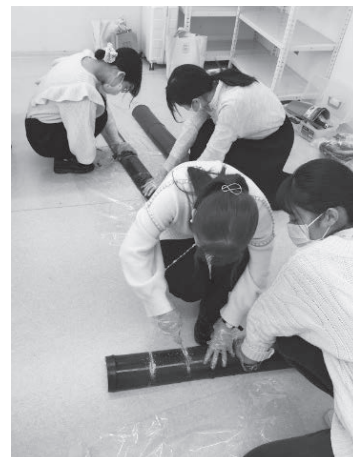
展示期間中はほぼ毎日、学生や責任者が水やり・花の取り換えといった『メンテナンス』を行った。1月5日の撤去まで、順調に活動を終えることができた。

活動結果

「地域活性化」「地域課題解決」などへ寄与した点など

28日の展示では、分担者・木村の知り合いの華道の指導者が偶然三鷹駅を利用しており、作品制作に足を止めてくださった。「こういう場があると、いろんな人に見てもらえるし、学生さんも張り合いが出るわね」とお話しされていた。

31日午後に花の入れ替えを実施した際、地域の方から「どうやって花を入れているのですか？」と質問があった。活動をととして、地域の方と交流を図ることができ、地域活性化に寄与できたのではないかと考える。



12月28日 展示場所

学生への教育的効果

本活動に参加する学生の教育的効果は2点ある。

1つ目は、参加する学生の『コミュニケーションスキルを育むこと』である。

今回の展示は、1年生が半数以上の人数を占めており、展示自体を初めて経験する学生だった。

竹の加工を行う場面では、学内の準備や試作ではうまくできなかったのに現地の展示場ではうまくいかなかったことが起きたが、1年生たちは自ら先輩たちに相談して作業していく一連の動きがあった。

「昨今の若者は対面でのコミュニケーションをとることが苦手、希薄」と言われるが、一方で「当面の付き合いに必要な情報を共有できていれば、十分に濃密な関係を築くことができる。いわば全面総括型ではなく、一極集中型のコミュニケーション様式へと変貌している」とも言われている。それを責任者・分担者ともに体感していた。

さらに一極集中型のコミュニケーションをつなぎ合わせ、全体総括ができるようなスキルを身につけ、相手がどんなことを考えているのか、次に必要なことは何かを「想像し得る人」になることができれば、コミュニケーションスキルを向上させることになるのではとの示唆を得た。

2つ目は、この展示自体が学生の『モチベーションの向上』になっていることである。

井の頭キャンパスへ移転した2016年から始めたこの活動は、コロナ禍でも継続してきたこともあり、「先輩たちが代々続けてきたこの活動の場を絶やしたくない」という認識が部員たちにはある。

責任者も、準備等で「作品展示をする場合、出瓶料が生じたり、こちらからお願いしないと展示はできない。しかしアトレさんの『依頼』や『ご厚意』で展示させてもらえ



ている。『ありがたい』と思って展示しよう」と説明をしている。それらを意識して展示をすることで、12月29日以降もシフトを組んで、水やり・花の取り換えといった、『メンテナンス』を実施することができた。

メンテナンスは、各日30分もかからずに終わるものだが、時間を費やしても実施していることは、学生にとってこの展示自体が「いろんな人に見てもらえる嬉しさ・楽しさがあるから頑張る」という『モチベーションの向上』につながっているのではないかと考える。

今後は、そのモチベーションを維持できるように、部員たち同士で声を掛け合いながら、継続していけるように仕向けたいと考えている。

これら2点は、活動の目的とも合致しており、地域での活動をととして学生への教育的効果も得られると言える。

今年度は部員数も増え、アイデアや作品制作時の工夫なども、今まで以上に主体的に取り組む活動になりつつある。活動が継続できるように、今回の展示の反省点等を拾い上げて、今後に生かしていきたいと考えている。



12月31日からの展示

JR東日本との協働による「学生が考えた駅からハイキング」プログラムの企画・運営

■実施日：2023年 4 月～2024年 3 月
■担当者：志村 良浩 外国語学部
観光交流文化学科 教授

目 的

この活動は、JR東日本八王子支社三鷹営業統括センターと協働し、地域振興・観光資源発掘に資するJR東日本主催の駅を基点とするウォーキングイベントである「学生が考えた駅からハイキング」の企画・運営を通して展開する教育活動・社会貢献活動である。

三鷹市の観光振興、にぎわい創出、一般市民のハイキング参加による健康寿命延伸に寄与するとともに、学外での学びの場を学生に提供することで、コミュニケーション能力や企画力、事業運営能力を高めることを企図している。

今回は、JR三鷹駅を起点とした当該企画の過去 5 回の経験をもとに、新たなコンセプトによるオリジナルコース設定を行う。

活動内容

〈スケジュール〉

- ①2023年 4 ～ 5 月…基本構想の設定、資料収集、各種事業者との顔合わせ・調整、フィールド調査
- ②2023年 6 ～ 9 月…観光資源のフィールド調査、各種事業者との調整、ルートの作成と参加申請
- ③2023年10～11月…各種事業者との最終調整、ポスター作成、しおり作成、受付業務の最終確認
- ④2023年10月28・29日、11月 3 ・ 4 ・ 5 日…ハイキング開催日の受付業務担当
- 2023年10月28・29日…杏林祭の屋内企画にて当該活動の展示・概要紹介
- ⑤2023年12月～2024年 3 月…総括とまとめ



駅からハイキング当日の受付開始時の様子

活動結果

〈活動実績〉

ハイキング開催日

10月28・29日、11月 3 ・ 4 ・ 5 日（計 5 日間）

ハイキング参加者

駅からハイキングに参加した関東圏の一般市民 約1,000 名（集計・JR東日本）

本学参加者

志村良浩ゼミナールの学生有志 3 ・ 4 年生 計14名

〈活動の成果〉

ハイキングコース名称

「学生駅ハイ」“秋を楽しむ”三鷹と調布の公園・神社巡り&深大寺エリア散策

ハイキングコースルート

JR三鷹駅（受付）⇒ 風の散歩道 ⇒ 山本有三記念館 ⇒ 井の頭恩賜公園 ⇒ 杏林大学井の頭キャンパス ⇒ 三鷹市立仙川平和公園 ⇒ 三鷹市農業公園 ⇒ 青渭神社 ⇒ 深大寺 ⇒ 神代植物公園 ⇒ 野崎八幡社 ⇒ 井口八幡神社 ⇒ 大鷲神社 ⇒ 杵築大社 ⇒ JR武蔵境駅（ゴール）
全長：約12.5km

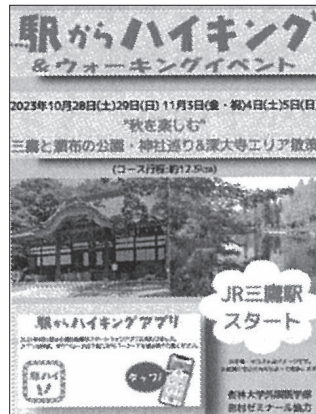
〈教育的効果〉

プログラム参加者の大半はJR三鷹駅を普段利用しない都内および関東近県に居住する一般市民である。

人気スポットである深大寺や秋バラが見ごろを迎えた神代植物公園、井の頭恩賜公園だけでなく周辺の各公園、神社仏閣、周辺の商店店舗などの魅力を体感してもらう良い機会を提供できたことから、三鷹駅～三鷹市～調布市の地域・観光スポット紹介による魅力発信・地域振興に大きく貢献できた。

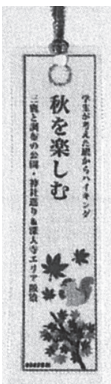
また、日程を本学の大学祭開催日に合わせたことで井の頭キャンパスに立ち寄ったハイキング参加も多く、本学の知名度向上にも一定程度寄与したと考える。

学生が記念のしおり（約1,000部）を作成し、JR三鷹駅



学生がデザインしたポスターが三鷹駅や近隣駅構内で掲示された

学生手作りのしおり
(参加者配布用)



JR東日本との振り返り
会議の様子

前の受付で当日の参加者に配布した。その他、駅構内に掲示するポスター作成や開催日当日の受付業務、駅構内での案内アナウンスも実施した。

まとめ

今年度のプログラムで、学生はJR三鷹駅関係者との打ち合わせを重ねつつ、約半年かけて当該企画を準備し、観光スポットを選定するためのリサーチと 4 回に及ぶフィー

ルド調査による検証などを行った。

社会人との調整・交渉、マップ校正の綿密な確認作業などを通じてコミュニケーション能力や企画力、事業運営能力を高めることができた。企画・運営を進めてきたゼミナール学生に与える教育的効果は非常に高く、プロジェクトを完遂できた充足感を味わい、多くの学びを得た。

この貴重な活動を支援していただいた地域交流課の関係各位に感謝したい。

地域における社会貢献活動 ⑧

備えとしての関係づくり

―避難所でも高齢者と子どもが心身共に健やかに暮らすためのアクティビティ―

■実施日：2024年 2 月 3 日、3 月 2 日
■担当者：古川 美和 保健学部 看護学科 講師
荒井 芳紀 秋草学園福祉教育専門学校 専任教員
森 更紗 AOBA-JAPAN BILINGUAL PRESCHOOL 体操講師
合原 聡美 むチューいきいきサロン TA
亀山 直子 保健学部 看護学科 准教授

目 的

本活動は、大災害時に備え、避難所における共助力の向上と、避難所で高齢者と子どもたちが心身の健康を維持できるようにすることを目指している。

そこで本活動の目的は、避難所で行える高齢者と若者、子どもと一緒に、楽しく参加できるアクティビティを体験し、多世代で顔見知りの関係を構築するとともに、避難所生活における健康管理と生活物資の搬送の工夫に関するレクチャーを行うことである。

活動内容

1）活動の概要

本活動は 2 月 3 日と 3 月 2 日の 2 日間、10時から11時半

での 1 時間、武蔵野市中央地区商店連合会事務所、通称「むチュー事務所」で行った。

両日ともに、前半の30分間は、避難所における健康管理の方法や生活上の工夫に関するレクチャーを実施した。後半の30分間は、高齢者、幼児、学童、学生が混ざって、避難所で行える（筋力トレーニング要素のあるレクリエーション）アクティビティを実施した。

2）活動の参加者

2 日間の参加者総数は49名（ボランティア、運営スタッフ含む）。

対象者は、2 月 3 日11名、3 月 2 日17名、ボランティアは、2 月 3 日 2 名、3 月 2 日 6 名だった。

3）レクチャーの実際と参加者の反応

1 月に起きた能登地震の被災状況を踏まえ、荒井氏と本学古川講師、ボランティア学生 4 名が約30分のレクチャーを実施した。

〈2月3日〉

①やけどの手当と風呂敷リュック作り

荒井氏が能登地震での 5 歳児のやけどによる死亡例を紹介し、医療救護活動のトリアージ基準や熱傷の応急処置の方法について説明した。また、ポリ袋を使った熱傷の応急処置の方法を説明し、傷の手当て、備品の搬送に風呂敷を活用する方法、さらには風呂敷を使ったリュックサックの

作り方を説明した（写真1）。

次に古川講師が避難所生活と災害経験が子どもに与える心理的影響や、遊びの重要性についてレクチャーした。避難所での子どもたちの心のケアや、適切な遊びの提供が災害後の心の安定にどれほど重要かを強調した。

〈3月2日〉

②紙芝居によるエコノミー症候群の予防法とお手軽ホットタオルの作り方

本学の3年生4名が、避難生活でのエコノミー症候群の予防に関する約10分間のレクチャーを行った（写真2、3）。さらに座ったままできる両下肢の運動も実施した。興味を持ってもらえるよう紙芝居方式で情報提供が行われた。災害時には教員が不在であるため、このレクチャーは学生の主体性を重視し、内容と方法は完全に学生のアイデアによって実施された。

学生のレクチャーが終了した後、荒井氏による少量の熱湯で作るホットタオルに関するレクチャーが行われた。学生たちは、子供や高齢者が熱湯でやけどしないように、目線を合わせて声をかけ手助けをしていた。こうした配慮は、これまでの臨床実習の学びが活かされていた。

4）アクティビティ

〈2月3日〉

①足づくり玉入れ競争

子ども、高齢者、成人が混ざったチームで、新聞紙を玉の代わりにした玉入れ競技を行った。エコノミー症候群（静脈血栓症）の予防を目指し、骨盤を含む下半身のトレーニングとなるよう、手を使わずに両足で玉をつくった。その後、プラスチック製のバスケットを玉入れのかごとして活用し、1分間の玉入れ競技を開始した。運動会で流れる「天国と地獄」の音楽と同時に時間制限が告知されると、場の熱気が高まり雰囲気が一気に盛り上がった。玉入れは熱戦を繰り広げ、高齢者も自然に立ち上がり、子どもたちは飛び跳ねながら競技に取り組んだ。

ある子どもは籠からこぼれた玉を拾って高齢者に手渡すなど、子供たちが高齢者を自然に手助けする様子が観察された。

〈3月2日〉

②脚トレ輪投げ競争

子ども、高齢者、成人が混ざったチームで、新聞紙を使用して脚のトレーニングを取り入れた輪投げを行った。この活動は、避難所生活において歩行が制限されることで、腸腰筋の筋力低下防止を考慮して企画された。高齢者は腸腰筋維持のために、子どもたちはより興味を持って参加できるよう、輪投げを足でキャッチする形式にアレンジした。

輪をキャッチする棒を大腿部に装着することで（写真4）参加者たちは自然に足を上げて輪をキャッチする。それまで母親に抱っこされていた3歳児も、母親から離れて喜んで参加していた。

学生ボランティアは、落ちた輪を拾い上げて参加者に渡し、自らも競技に参加した。この日も2月3日と同様にテンポの速い「天国と地獄」の音楽を流し、声を出し体が自



（写真1）
風呂敷リュックサックを
一緒に作成する高齢者
と学童



（写真2）紙芝居でレクチャーする学生



（写真3）目線の高さを合わせ



（写真4）脚で輪をキャッチ

然に動く熱気に満ちたレクリエーションとなった。

学生への教育的効果

学生が自主的にレクチャーしたこの経験は、災害時に避難所で「何かしてみよう」という背中を押す経験につながった。学生からは「子どもと高齢者が関わりを深めていくことで、いざという時に助け合いができるのでは」「子どもから大人まで楽しめるレクや避難所で活用出来る知恵を通して、つながりの大切さを実感することが出来た」というコメントが寄せられた。避難所で多世代が互助的な関係性をつくる方法やつながりの重要性を学べた。

まとめ

地域の活性化への効果と期待

参加した学生は「地元とのつながりができたことが嬉しくまた参加したい」と喜びを感じていた。本学の学生が地域活動に積極的に参加し、地元の人々とのつながりを築き地域活性化に一定の貢献を果たしたといえる。

幼児、学童、若者（学生）高齢者が、ひとりも取りこぼされず、一緒に同じことを同じ熱量で経験が共有できたこの活動は、地域全体の結束が強まり、活気が生まれることが期待される。今後も地域社会との連携を強化し、持続的な地域貢献活動を展開していくことが重要と考える。

地域における社会貢献活動 ⑨

地域で暮らす子どもの救急対応の研修会 — 乳幼児を預かる方への教育支援 —

■実施日：2024年2月5日ほか

■担当者：藤田 千春 保健学部 看護学科 教授
山内 亮子 保健学部 看護学科 学内講師
場家美沙紀 保健学部 看護学科 学内講師
小林 佳寛 保健学部 看護学科 助教

目 的

近年、子どもをもつ共働き世帯の増加に伴って、多くの乳幼児が保育施設等で日中過ごしている。子どもの多くは健常児であるが、誤嚥、転落、交通事故、溺水といった不慮の事故により心肺停止につながる状況が少数ながらも生じている。

子どもを預かる職種の多くは、消防署等の救命講習を受けているが、2年～3年に1度程度の受講であり、胸骨圧迫をはじめとした一次救命処置の実践には期間が開くほど消極的になりがちになる。しかし、不慮の事故から子どもの命を守るために、子どもに関わる職種は一次救命処置の技術を身につけておくことが望ましい。

そこで本活動の目的は、保育・子育て支援施設の職員に乳幼児の救急対応の技術をコンパクトな時間で学ぶことを支援するものである。これにより技術面の向上を図り、万が一の時に、一次救命処置の実践につなげることを期待した。

活動内容

1．活動への準備

1）学生ボランティアの募集

看護養護教育学専攻の2年生6名の応募があり、学生にはオリエンテーションと、事前学習課題を提示した。

2）講習プログラムの準備

施設でニーズが高そうな講習内容と施設で必要な講習を選択できるよう、項目ごとの指導プログラムを検討した。また、60～90分程度で複数回練習ができる実技プログラムも作成した。

内容の組み立てや要点を受講者に伝えやすくするために、担当教員全てが改めてAHAのBLS講習2020で自己研鑽した。また他受講者の取り組みを観察し、受講者が欲している内容や動作の特性を観察し、技術のポイントに取り入れた。

3）学生ボランティアとの練習会

2024年1月25日午後13時半から16時まで、学生と共に勉強会と技術面の講習会を行った。

2．活動の実施

1）実施日、施設

- ①2月5日 羽村市内保育園
- ②2月8日 羽村市内保育園
- ③2月26日 小田原市内子育て支援センター

2）当日の受講者数

上記①12名、②9名、③11名の計32名で、職種は保育士、子育て支援員、事務職員であった。

3）実施した講習プログラム

〈基本コース〉

- AEDの取り扱い方、管理の仕方（講義）
- 一次救命処置とAED実施（安全確認・意識確認→胸骨圧迫と人工呼吸の繰り返し→AED実技）

〈施設の希望や所要時間による選択〉

- 窒息の解除

特に技術面の練習が複数回できるように配慮した。施設によってはケガの手当ての講義を希望されたため、所要時間が確保できる場合に限りケガの手当の講義をした。

4）受講の様子

年配者は圧迫の深さが足りない様子があり、何度か声掛けを行った。

受講を通して、実際に事故が生じた時の救助人員や他の子どもに対応する人員の采配について考えるきっかけとなった。



乳児の救急処置のデモ



グループ練習の一場面

受講者からは「特に乳幼児の胸骨圧迫について学べて良かった」「シミュレーターや練習用AEDを使ってできたのが分かりやすかった」「繰り返し練習したい」などの意見があり好評だった。

学生参加の効果

グループに教員と学生ボランティアを配置し、受講者が適宜質問しやすい環境を設定した。参加した学生は事前学習や自主練習も十分にしており、受講者に実施上のポイントを丁寧に伝えることができていた。学生自身の学習向上

地域における社会貢献活動 ⑩

川越市「玉力製菓」との商品開発企画

- 実施日：2023年5月1日～2024年3月31日
- 担当者：木暮健太郎 総合政策学部 教授

目 的

埼玉県川越市、菓子屋横丁に位置する創業100年の「玉力製菓」と総合政策学部の学生有志による商品開発プロジェクトを企画した。

若年層に向けた新たな商品を企画、販売することを通じて、①まちの賑わいをもたらすこと、②創業100年にも及ぶ老舗の店舗経営に貢献すること、③学生による地域活動を促進し、達成感を与えることを目的とする。

活動内容

対象者：玉力製菓代表・久保田淳氏

対象者人数：玉力製菓3名および有志学生8名と教員

2021年度に行った玉力製菓と有志学生の商品開発のアイデアは、“食べるまで味がわからない”透明な「謎飴」というものであった。特に若い世代にアピールするための試

と共に、受講者とのコミュニケーションスキルを学ぶ場にも寄与したと思われる。

まとめ

救命講習受講経験者は、今回の練習で以前の講習内容を思い出していたので、年1回程度の間隔でも練習の機会があると万が一の場面で適切な実践ができる可能性がある。他の施設からも受講希望の連絡が寄せられているため、今後も受講者のスキルアップと意識向上に貢献出来たら良いと考える。

みであったが、販売当日には多くの世代からの興味・関心を集め、結果として2日間で限定400個が完売し、地域の賑わいに貢献することとなった。

今回玉力製菓では、2023年秋の観光シーズンを目途とし、「謎飴vol.3」の企画、販売を決定した。

2023年9月より玉力製菓の代表、久保田淳氏と有志学生とのzoomを通じた打ち合わせを複数回にわたって実施し、新商品の発売日を2023年10月21日（土）、22日（日）の2日間とすることが決定した。

両日ともに4名の有志学生が現地に赴き、久保田淳氏の指導のもと、飴の袋詰め作業を行い、午前10時から午後3時まで店頭での販売を実施した。合計400個生産した新商品を2日間で完売させることができた。

活動結果

創業100年の歴史を有する玉力製菓の従業員は、代表の久保田氏を含めて3名であり、日々の業務に追われており新商品の開発にかかる時間的な余裕などが著しく制約された状況であった。一方で、久保田氏によれば、若い



玉力製菓での商品開発



約400個完売された「謎飴」



世代のアイデアを活かした新商品の開発に対する期待が存在していた。

こうした課題に対して、有志学生による商品開発が行われ、2日間を通して400個もの商品が完売したことは、玉力製菓はもとより、2日間を通じて訪れた観光客にも学生発の新商品が受け入れられ、地域の活性化に一定程度、寄与したと考えられる。

地域課題の解決においては、教室にいただけではなく、実際にその地域に赴き、活動することが何よりも重要であることを改めて感じたプロジェクトであった。

学生への教育的効果

総合政策学部の教育目標は、多様な社会課題を発見し、

地域における社会貢献活動 ⑪

地域医療に貢献する 診療放射線技師の仕事体験

- 実施日：2024年3月26日
- 担当者：山本 智朗 保健学部 診療放射線技術学科 教授
松友 紀和 保健学部 診療放射線技術学科 准教授
石川 純也 保健学部 診療放射線技術学科 講師
芝生 春菜 保健学部 診療放射線技術学科 学内講師
只野 喜一 保健学部 診療放射線技術学科 学内講師
遠藤 祐太 保健学部 診療放射線技術学科 助教

目 的

本活動の目的は、診療放射線技師の職業体験の機会を地域の児童や生徒たちに提供し、その業務や役割を理解してもらうことである。

診療放射線技師の仕事は、X線撮影のほかその業務は地域医療から災害医療、さらには国際的な活動に至るまで多岐にわたっている。診療放射線技師になるためには国家試験の合格が必須となるため、可能な限り早い段階でこの職種について理解を深めてもらい、医療職の一つとしての魅力を感じ取ってもらうことが重要となる。

活動内容

参加者は7名（うち保護者3名）で、アシスタントとして杏林大学大学院保健学研究科博士前期課程保健学専攻の2名が参加した。

体験会では、実際に放射線を取り扱うことなく職業を理解する方法として午前中に①レントゲン撮影、②ベッドサ

解決に貢献できるような人材を育成することにある。その意味において、今回に商品開発プロジェクトでは、学生が玉力製菓の代表である久保田氏からヒアリングを行い、どのような商品を考案するのかについて検討し、また商品パッケージのデザインや販売時に使用したPOPなどのアイデアも含め、学生が主体的にこのプロジェクトに取り組むことができた。学生自らが発案した商品を自分たちの手で販売し、完売したことを通じて、学生の達成感や自己肯定感といった面で多くのポジティブな効果があったと感じている。

また学生が主体的に課題発見と解決に関わることを通じて、自らの学びを深め、学びのモチベーションを向上させることにも結び付くと感じている。今後もさまざまな地域で活動を継続させていきたい。

イド撮影（ポータブル撮影）、及び③VRを用いた模擬レントゲン撮影を、午後からは④X線CT撮影及び3D画像処理を実施した。

①レントゲン撮影

X線の吸収率が異なる3種類の立方体とミニカーを用い、X線の物理的性質及び撮影原理についてゲーム形式を通じて理解を深めてもらった。

②ベッドサイド撮影（ポータブル撮影）

続いて、参加者はポータブル撮影装置を操作し、模擬病室にてポータブル撮影の体験を行った（写真1）。



写真1

この撮影は、移動が困難な患者に対して主に用いられ、一般の人々が目にする機会は限られている。またポータブル撮影は、緊急を要する場合があるため、参加者はそれぞれに緊張した面持ちで撮影を体験していた。

③VRを用いた模擬レントゲン撮影

腹部と膝蓋骨の撮影で撮影条件が画像に与える影響についてデモンストレーションをしながら解説した。その後、

参加者自身がVR装着した。VRでは仮想空間内で患者さんを動かして撮影ができ、画像も出力されるため、参加者自身で撮影準備、患者さんの位置調整、撮影、画像の確認までを行い、レントゲン撮影業務の流れを体験した。

④X線CT撮影

原理の説明を簡単に行い、実際に装置を動かしてCT撮影の流れを体験した（写真2）。

また、参加者はCTを使って撮影された鰯^{ブリ}のCT画像を基に、3Dワークステーションを使用して鰯^{ブリ}の3D画像処理を行った。

⑤3D画像処理

3D画像処理は、臓器や病気を立体的に観察できるため、診断精度の向上や手術計画の最適化のみならず、教育や研究ツールとしても重要な役割を持つ。診療放射線技師はCT撮影後に3D画像処理を含む後処理を行い、診断しやすい画像を医師に提供する。参加者には、鰯^{ブリ}を立体的に観察するだけでなく、骨だけの画像や鰯^{ブリ}をさばいた画像を作成してもらうことで、画像診断を支える技術や、診療放射線技師が果たす役割について理解を深めてもらった（写真3）。



写真2



写真3

クティビティは、参加者に深い理解を提供する貴重な機会となり、さらに診療放射線技師という職業への関心を高めることに寄与したと考えられる。

教育的効果

体験会の参加者は、小学生から高校生と幅広く、参加した本学学生には年代に応じた対応方法を学ぶ貴重な機会となった。また、放射線関連機器を扱う際の安全管理や配慮の工夫についても学ぶことができ、参加した本学学生にも貴重な体験となった。

活動結果

2020年の文部科学省報告によると、授業等で放射線に関する内容を扱うまたは扱う予定がある学校の割合は、小学校で約70%、中学校で約90%以上、高等学校で約80%である。若い世代にとって放射線は、放射線教育がなかった30代から50代よりも身近である。しかし放射線関連の検査を受けた経験はあっても業務を体験できる場は少なく、また小・中・高等学校ともに放射線に関する授業に外部人材を活用している割合は10%未満である。

このような背景から、今回実施した体験会は診療放射線技師の業務を理解する上で重要な役割を担ったと考えられる。特に体験会で行われた放射線検査に関する実践的なア

地域における社会貢献活動 ⑫

Mindful Community Project —「マインドフルネスサロン」による地域支援—

■実施日：2023年5月1日～2024年2月15日
■担当者：岡村 裕 総合政策学部 教授

目 的

マインドフルネスは、欧米を中心にその実践と研究が進められている「今ここへの気づき」を促す心のエクササイズである。

2022年度に引き続き、同じ地域に暮らす人々が、心静かにお互いを思いやり、よりよい生活を送ることができるように支援する「Mindful Community Project」を企画し、「マインドフルネス」のオンライン・対面型ワークショップ等を通じて、その学習・体験・周知活動を行うことを目的とした。

2023年度は、新たに「マインドフルネスサロン」を定期的に開催することで、地域の人々が継続して実践できるように支援することを目的とした。

方 法

対面でのプレゼンと実践を原則とし、必要に応じてオンラインあるいは動画配信を行うこととした。

2023年度は、地域の人々にとってマインドフルネスがさ

活動内容

表1 2023年度活動実績

活動分野	日付	内容	参加人数(名)	形式
1. 学内講座 マインドフルネスとは	7/7	総合政策学部「ラインプランニング」	243	対面
	8/18	高校生対象「先生図鑑」	5	対面（交流プラザ）
	12/15	保健学部「職業適性論」	311	動画配信
2. マインドフルネスサロン (写真1)	5/18	おむすびハウス三鷹「心のエクササイズ」	19	対面（交流プラザ）
	6/22	マインドフルアクティビティ	20	対面（交流プラザ）
	7/20	おむすびハウス三鷹「心のエクササイズ」	21	対面（交流プラザ）
	10/19	おむすびハウス三鷹「心のエクササイズ」	22	対面（交流プラザ）
	11/9	マインドフルアクティビティ	20	対面（交流プラザ）
	12/14	おむすびハウス三鷹「心のエクササイズ」	22	対面（交流プラザ）
	1/12	マインドフルアクティビティ	23	対面（交流プラザ）
	10/28	総合政策学部「ゼミ連企画報告会」	30	対面（E105）
3. 研究発表	9/7	大学間研究報告会①（関西大学）（写真2）	21	対面（関西大学）
	11/30	大学間研究報告会②（関西大学）	24	オンライン
	12/23	学生によるミタカ・ミライ研究アワード（写真3）	50	対面
4. 出張プレゼン	11/24	三鷹市立第四小学校	4	対面（訪問）
	2/5	おむすびハウス「マインドフルエイジング」	25	対面（訪問）
5. その他の活動		マインドフルネス ガイド リーフレットの配布	100	



写真1 マインドフルネスサロン



写真2 共同研究報告会（関西大学）



写真3 ミタカ・ミライ研究アワード

活動結果

「マインドフルネスサロン」はすべて対面形式で、延べ200名近くの参加者を対象として実施することができた。

参加者の多くはリピーターで、年間を通してサロンへの参加を継続していた。サロンでは、毎回少なくとも一つは新しいプログラムを提示し、参加者の満足度が高まるように工夫した。

サロン以外では、今年度は「教育現場におけるマインドフルネス実践」のアイデアについて検討し、「総合政策学部のプレゼン大会」、「他大学(関西大学)との合同研究報告会」、「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2023」において報告した。教育現場にマインドフルネスを導入することの意義・メリット、導入する際の具体的なアイデアについて関係者にプレゼンし、意見交換することができた。

考 察

「マインドフルネスサロン」への参加者の多くはリピーターで、ある程度の満足度を維持できていたと思われるが、参加者の中には一回の参加で終了する者もいた。年度が変わることで担当学生も変わり、それに伴いプレゼンやプログラム進行方法においても若干の変化が見られた。

参加学生がサロンの事前準備(企画も含む)を十分にできていなかったと思われる時には、参加者の満足度も低い傾向にあった。また、サロン担当学生は毎回グループ単位でその企画や運営を担う形となっていたが、担当者間のコミュニケーションが十分でなかった時には、サロンの進行もスムーズにできていなかった。サロンにおいては、担当学生に対する十分な事前準備へのサポートが重要であることが再認識された。

教育

地域を志向した教育活動

2023年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」開講

開講式・ガイダンス

4月1日（土）、「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」の開講式が行われた。

杏林大学では少子高齢化の進む社会にあり、地域課題に率先して取り組むコミュニティリーダーの育成に力を注いでいる。今年度は三鷹市、武蔵野市、八王子市から5名の履修生を迎えた。

式典では、石井博之センター長から「様々な人との出会いから多くの影響を受けた。履修生の方もこれから1年で経験する様々な人との出会いを大切に、充実した学生生活を送ってほしい」と挨拶があった。

公開講演会

本プログラムの必修科目である特別講座Aでは、5月13日（土）に公開講演会を行った。講師にはノンフィクション作家でもある、トカイナカコンソーシアム代表の神山典士氏をお迎えし、『わたしたちが考えねばならない「下り列車に乗った」国づくり』というテーマで地方創生について取材に基づく貴重なお話をしていただいた。

講演では、はじめにこれまで国策として行われてきた東京一極集中から、若者の都会離れやコロナ禍により分散型社会へ移行してきていることに触れ、都心から1.5時間エリアを活性化して分散型社会のモデルをつくる「トカイナカ構想」やその実践例の話があった。神山氏の取り組み実践例として、埼玉県川越市やときがわ町の町営ホールを利用したコンサートや脳科学者である茂木健一郎氏らを招いたセミナーや懇親会、さらに宿泊のサービスを行い活性化を図り、地方分散型社会の実現を目指していること等の説明があった。

参加者からは地域活動の多様性と具体的内容が参考になった、現代の抱える問題意識と将来への取り組みについて理解が深まった、等の感想が聞かれ好評だった。

杏林祭等での活動

10月7日（土）、東多世代交流センターで「こども祭り」が行われた。履修生とOBの会「Corekara みたか」で活動する修了生がブース出展を行い、「防災」をテーマに新聞紙や牛乳パックを使った防災グッズを参加者とともに作成した。

10月28日（土）～10月29日（日）に井の頭キャンパスでは「杏林祭」が開催され、「持続性のある地域社会」と「防

災」をテーマに出展した。「パラコード」と呼ばれる細いロープを使った防災プレスレットの作成や、分別ごみ利用のおもちゃ作り、ペットボトルを使った防災ランプの光度の比較等、履修生考案の手作りグッズや指導を多くの参加者が楽しみながら体験した。

特別講座Aでは、「学びから活動へ」をスローガンに「活動に活かす学習」と「学習後の履修生による自主的実践活動」を行っており、こうした活動は講座の学びを実践する場となった。特別講座Aの特任講師である井上晶子先生からは「社会経験を重ねた履修生は多様な知恵とスキル、多くの情報、広域にわたる人脈を持っており、活動を高める「つながり」は大学にとって貴重な「財」と捉えている。これらの資源を活かし学びを深め、今後もさらに活躍してほしい」とコメントした。

修了式・意見交換会

2024年3月16日（土）、2023年度修了式が行われ、4名の履修生に履修証明書が授与された。

履修生からは「地域で実践されている地域活動に対して、訪問側でなく実施側から参加できたことは貴重な体験であり、今後の自身の取り組みの参考となった」「医学的プログラムや観光/温泉学等、他では学べない講座が素晴らしく、先生方との交流は素晴らしかった」等の意見をいただいた。

修了式後には、1年間を振り返った意見交換会が行われた。教員からは必修科目での授業の様子などの他、今後の課題として、行政が提供する市民講座や近隣大学でも様々な講座が行われているが、講座の提供目的、対象者をより明確にしていく必要があると話があった。

いただいた意見は今後の講座の運営に活用し、プログラムの在り方を検討していきたい。

修了式

地域総合研究所・地域連携センター

地域連携を推進する

「2023年度 杏林大学地域総合研究所フォーラム」を開催『地域貢献活動の発展について考える』

- 日時：2024年3月11日（月）
- 形式：対面開催・一部動画配信
- 主催：杏林大学地域総合研究所
- 共催：杏林大学地域連携センター

2024年3月11日（月）に杏林大学地域総合研究所フォーラムを対面形式にて開催した。今年度のフォーラムは『地域貢献活動の発展について考える』と題して学部間連携・学科間連携の発展を重視し、学内者対象の開催とした。

講演に先立ち、開会の挨拶を行った渡邊 卓学長は、総合大学の強みを活かして多様な専門分野の取り組みを各学部の先生方からご紹介いただき地域活動の相互理解を深めることで、今後杏林大学としてどのような地域貢献活動に取り組むことが出来るか探ることが重要だと言及した。

フォーラムは第一部の活動紹介を兼ねた講演と第二部のラウンドテーブルで構成され、第一部では各学部から7名の先生から地域貢献活動についての紹介の講演がされた。当日動画発表予定の活動については後日配信を行った。

フォーラムのチラシ

渡邊卓学長による開会挨拶

ラウンドテーブルでの意見交換

長島文夫教授による閉会の挨拶

〈第一部 プログラム〉

- 総合政策学部 木暮健太郎 教授
クラフトマーケットの開催
- 外国語学部 小堀貴亮 教授
ウェルネスツーリズム「にぎわい創出・健康寿命延伸」
- 保健学部 楠田美奈 学内講師
生涯スポーツの機会提供プログラム（羽村市）
- 保健学部 榎本雪絵 准教授 健幸教室（三鷹市）
- 医学部 江頭説子 准教授
地域・社会とのかかわりを学ぶ体験学習
- 医学部 富田泰彦 教授
保健・医療教育における多職種連携
- 総合政策学部 北島勉 教授
在留外国人に対する取り組み
- 保健学部 門馬博 講師
体力測定の取り組み（三鷹市）※後日動画配信

第二部のラウンドテーブルでは講演者の先生を中心にテーブルを分けて参加者を交え、第一部の講演内容を踏まえた活発な意見交換がなされた。

あるグループからは「専門の異なる先生の取り組みを知る機会には少なく、このような機会に触れることはとても刺激的で新しい研究の糸口や発見、地域貢献の取り組みのスタートとなる」と感想が述べられた。

フォーラムの締めくくりには杏林大学地域総合研究所所長の長島文夫先生から「各先生の取り組みを知り、ラウンドテーブルの意見交換を経て具体的な取り組みに至るまで話が進展している先生がいる可能性は高く、そこをサポートするのが地域総合研究所なので、積極的に地域活動を進めて欲しい」と挨拶があった。

教育／地域総合研究所・地域連携センター

40

41

地域との連携活動

自治体他との連携

杏林大学では、大学が有する人的・知的資源を有効に活用し、キャンパス周辺地域を中心に活発な交流活動が続けている。活力ある地域社会の創造や人材育成などを目的として各自治体と包括連携協定を締結し、相互の資源の活用による地域活性化、教育研究効果の促進を目指して様々な連携事業を実施した。

また、大学コンソーシアム八王子に加盟し、生涯学習の推進や情報発信、学生と市民の交流、外国人留学生の支援などの事業に取り組んでいる。2023年度には新たに愛知県田原市の他、2団体と連携協定を締結した。

連携先一覧

- 2009年 4月
- 大学コンソーシアム八王子に加盟
- 2010年 6月
- 羽村市
- 2013年 9月
- 三鷹市
- 2016年 8月
- 株式会社アトレ
- 2020年 1月
- 武蔵野市
- 2021年12月
- 静岡県東伊豆町
- 2022年 1月
- 秋田県湯沢市
- 2022年 3月
- 宮城県東松島市・石巻市
- 2023年 8月
- 社会福祉法人むうぷ
- 2023年 8月
- 愛知県田原市
- 2023年 9月
- 特定非営利活動法人Mitakaみんなの防災

三鷹市ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施日	学部
1	三鷹警察署ボランティア	4月1日～11月30日	保健学部
2	新入生歓迎会	4月4日	外国語学部
3	三鷹市スポーツ推進委員会	4月6日～2024年3月7日	外国語学部
4	だんだん・ばぁ（地域の子供達への食事提供）	4月12日～2024年2月28日	保健学部・総合政策学部・外国語学部
5	三鷹市学生教育ボランティア	5月8日～12月20日	保健学部
6	NPO法人文化学習協同ネットワーク（学習支援）	5月11日	保健学部
7	藤原ゼミ ゴミ拾いボランティア	5月20日・7月22日	総合政策学部
8	Craft Market@杏林大学	5月26日～28日・11月11日～12日	保健学部・総合政策学部・外国語学部
9	体育祭ボランティア（養護教諭のサポート）	5月27日	保健学部
10	※ JR東日本との協働企画 「学生が考えた駅からハイキング」	6月1日～2024年1月9日	外国語学部
11	三鷹中央通り商店会Mマルシェ	6月25日	総合政策学部
12	フリースペース・コスモ （子供たちの課外活動でのサポート）	6月26日～12月25日	保健学部
13	※ 三鷹健幸教室	7月8日・10月7日・12月2日 2024年2月10日	保健学部

三鷹市

●華道展示を実施

9月30日（土）三鷹中央防災公園・元気創造プラザで行われた「ガーデニングフェスタ」に、保健学部 楠田美奈 学内講師と華道部の学生有志が参加し、華道展示を行った。三鷹市の多くの団体が参加し、草花の販売やボランティア活動の報告、竹細工の体験会など、様々な催しが行われ、学外展示は初めての学生にとって、多くの方に作品を披露する機会は貴重な経験になった。

●三鷹市立小・中学校栄養士・養護教諭向け研修会

2024年2月22日（木）、三鷹市教育センターにて三鷹市立小・中学校の栄養士・養護教諭向けに「食物アレルギー」について学ぶ研修会が開かれ、杏林大学医学部付属病院 小児科 木村俊彦先生が講師を務めた。三鷹市からの依頼で実施されたもので多種多様な食物アレルギーに対して栄養士や養護教諭の方が日々抱えている問題に適切に対処できる知識を習得することを目的に行われた。

●東三鷹学園カレンダー作成

昨年度に引き続き外国語学部 古本ゼミの学生が2024年度東三鷹学園カレンダーの最終ページに掲載するテーママップを作成した。東三鷹学園コミュニティスクール委員会の方や三鷹市立第六中学校2年生の方々と協力し、中学生とゼミ生でインタビュー調査や現地調査を行い、推しスポットや名所をマップにし、地域の魅力を紹介した。

No.	活動名称	実施日	学部
14	サンシティ吉祥寺夏祭りボランティア	8月5日	保健学部
15	三小わいわい広場（夏季休業期間安全管理）	8月8日	保健学部
16	※ 2023いのちのおはなし会 （保育園児と保護者を対象とした性教育）	8月10日～2024年3月8日	保健学部
17	保育園ボランティア（園児とのコミュニケーション）	8月22日・9月15日・9月19日	保健学部
18	AVANTIポッチャトレニング会 （トレーニング会のサポート）	8月26日・11月25日・ 2024年3月2日	保健学部・外国語学部
19	第3回スポフェス実行委員会	9月1日・9月28日・9月29日	外国語学部
20	東多世代交流センター 「こども祭り」でのボランティアとブース出展	10月7日	外国語学部（社会人履修生）
21	みたかスポーツフェスティバル	10月7日～8日	外国語学部
22	なかよし教室（障がい児と一緒に遊んだり作業を行う）	10月18日～28日	保健学部
23	ポッチャシニアカップの審判兼大会運営ボランティア	10月21日	保健学部
24	令和5年度三鷹市総合防災訓練	11月5日	保健学部
25	THE ROAD RACE TOKYO TAMA 2023	12月3日	外国語学部
26	体協交流大会	12月16日	外国語学部
27	※ 花と迎える年末年始（華道部の作品展示）	12月28日～2024年1月5日	保健学部
28	LLJ 日本語学習ボランティア （在日外国人の日本語学習の支援）	2024年1月12日～2月19日	保健学部
29	ソフトバレー代表者集会	2024年1月13日	外国語学部
30	小学校の学生ボランティア （授業のサポートや見守り、付き添い）	2024年1月30日～3月14日	保健学部
31	※ 三鷹市立第六中学校 普通救命講習（BLS指導）	2024年2月5日～6日	保健学部
32	※ 第32回三鷹市民駅伝大会 救護ボランティア	2024年2月18日	保健学部
33	※ ツインズマーケット	2024年3月2日	保健学部・外国語学部
34	日本学校健康相談学会 第20回学術集会	2024年3月9日～10日	保健学部
35	これからのボランティア ～遠隔地からの災害支援 できることをさがそう～	2024年3月16日	保健学部
36	Mitakaみんなの防災フェスタ	2024年3月23日	総合政策学部・外国語学部
37	※ 診療放射線技師 職業体験会	2024年3月26日	保健学研究科
38	あつまれ新一年生！ （自転車誘導、小学生サポート）	2024年3月31日	総合政策学部

※地域活動助成費採択案件

羽村市

健康寿命延伸をはかる支援活動「生涯スポーツの機会提供プログラム」が継続実施された他、講師を派遣した各種講座と学生講座企画が計7回開催され、教育的な地域貢献活動が展開された。（P.43 公開講演会一覧 参照）

●青梅・羽村ピースメッセンジャー事業

8月4日（金）～6日（日）に青梅市と羽村市の共同事業である「ピースメッセンジャー事業」に外国語学部の学生1名が中学生グループのリーダーとして参加した。この事業は両市の中学生を広島へ派遣し、平和の大切さや戦争の悲惨さを学び、自ら発信できる人材育成を目的としている。事前研修の後、広島で平和記念資料館の見学、原爆体験者からの話、平和記念式典への参列などの活動を行った。参加した学生からは「戦争の記憶は風化するからこそ想いを繋いでいくことが大切だと感じた」「毎日中学生の新し

羽村市ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施日	学部
1	※ 羽村市・杏林大学共催 運動健康増進プログラム	6月10日・8月19日・12月16日・2024年2月10日	保健学部
2	※ 子どもに関わる職種を対象にした小児BLS研修	2024年2月5日・2月8日	保健学部

※地域活動助成費採択案件

い一面に出会うことが出来て嬉しかった」との感想が聞かれた。

●特別支援教育支援員・介助員研修会

11月1日（水）羽村市役所にて市内小・中学校で特別支援教育支援員や介助員をしている方の研修会が実施され、保健学部 田中美千子教授が講師を務めた。養護教諭として長年の勤務経験がある田中教授は保健室での子どもたちへの対応法等の体験談を交えながら「支援者が子どもに果たすアタッチメント機能」について説明した。これは子どもの感情が乱れた時に大人が受け止めることで、不安な時に頼った大人から安心感を得られると先の見通しがたち、次第に自立できるようになるという話があった。参加者からは具体的な対応策を教えてください、等の要望の他、アタッチメント機能のサイクルを利用して考えるとわかりやすかった、等の感想をいただいた。

八王子市

●防災イベントでKELC（杏林大学救急救命クラブ）が 応急手当を指導

9月9日（土）・10日（日）、JR八王子駅構内で行われた防災イベントの救急救命ワークショップブースで、KELCの部員21名が地域市民向けに心肺蘇生やAEDの使用方法を指導した。

この防災イベントは、関東大震災発生から100年の節目の年に当たり防災意識を高めるため、JR東日本八王子支社と大学コンソーシアム八王子加盟大学が地域活性化イベントとして実施したもので「学生と学ぶ、命のそなえ」をテーマに、部員たちは感染防止対策を図ったうえで訓練用の人形やAEDを使用して、2日間で約170名の方に応急手当を指導した。

初めて外部活動を行った4年生部員や応急手当普及員講習を終えたばかりの1年生部員にとっても、地域貢献に結びつく有意義な体験となった。

八王子市ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施日	学部
1	IFSCボルダリングワールドカップ2023八王子	4月23日	保健学部



●「第15回大学コンソーシアム八王子学生発表会」

12月9日（土）、10日（日）に開催された「第15回大学コンソーシアム八王子学生発表会」では総合政策学部の半田ゼミ生が参加し、奨励賞を受賞した。今回半田ゼミは「八王子市長へ直接提案セッション」に応募し、石森孝志市長の前で発表を行った。八王子の健康寿命と平均寿命に着目し、両者のギャップを埋めるために日々の健康を継続できるようウォーキングマップを作成し八王子市の推奨ルートとして提案した。

た」等と前向きな感想が聞かれた。

●「ケアリンピック武蔵野」での発表

12月2日（土）に開催された武蔵野市主催の「ケアリンピック武蔵野」では、CBL（コミュニティベースドラッシング）の課題解決型学習の一環として、総合政策学部の学生が武蔵野市内の介護サービス事業所へインタビュー取材を行い、高齢者介護の現状や介護所の魅力について伝える動画発表を行った。また、保健学部 古川美和講師が企画し、学生と協力した市民向けの応急救護の体験会の取り組みが最優秀賞を受賞した。受賞した企画は2022年3月に地域活動助成費の採択を受けて実施したもので、幅広い年齢層の市民向けに自助共助を促す取り組みが評価された。

武蔵野市ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施日	学部
1	武蔵野市学校ボランティア（家庭と子供の支援員）	4月17日～2024年3月8日	保健学部・外国語学部
2	三鷹国際交流フェスティバル （井の頭公園開催：英語司会・英語案内等）	9月24日	外国語学部
3	武蔵野市立第四小学校運動会（運動会のお手伝い）	9月30日	保健学部
4	三鷹の森フェスティバル （井の頭公園開催：運営補助、片付け）	10月22日	外国語学部
5	むチューキャンドルワークショップ（ワークショップの運営補助）	11月12日	保健学部
6	ポッチャ武蔵野カップ（会場誘導、受付、タイムキーパー等の業務）	11月23日	保健学部
7	むチューCandle Night Dining 2023（タンブラー販売、会場案内）	12月17日	保健学部
8	※ 備えとしての関係づくり （避難所でも健やかに暮らすためのアクティビティ）	2024年2月3日・3月2日	保健学部
9	三鷹市スポーツ推進委員会（吉祥寺開催：体協ボウリング大会）	2024年2月2日	外国語学部

※地域活動助成費採択案件

秋田県湯沢市

●フィールドスタディに参加

8月6日（日）～9日（水）に観光交流文化学科の学生4名が湯沢市において地域づくり・観光まちづくりを学ぶ研修に参加した。

七夕絵どうろうまつりでのアンケート調査やゆざわジオパーク等の観光資源の見学をし、地域の課題解決を考える研修の成果発表を行った。引率した志村良浩教授は、「観光と地域づくりを学ぶ学生にとって地域課題を体感し、人とのつながりを学ぶ良い機会になった」とコメントした。

●「かだる雪まつり」に参加



冬のイベント「かだる雪まつり」が、2024年2月3日（土）に湯沢市の旧秋ノ宮スキー場で開催され、地域住民と雪まつりを通じて交流を続けている本学の学生が、地元の団体や高校生らと協力して準備した。例年にない少雪で、毎年3,000個作っ

ているミニかまくらはわずかしきつくることができなかったが、無事に点灯して終わることが出来た。

静岡県東伊豆町

●渋谷で東伊豆町の温泉を紹介

9月30日（土）～10月22日（日）まで東伊豆町の温泉などを楽しむイベント「都会でオフロウ・渋谷温泉」が渋谷ストリームで行われ、外国語学部 小堀ゼミナールを中心とした学生が参加した。

このイベントは東伊豆町と（株）micro developmentの主催で、東伊豆町の特産物の物販や観光情報の発信、東伊豆町の源泉を使った足湯体験などのイベントが開催された。温泉観光学を専門に研究する小堀教授は包括連携先の東伊豆町においてもウェルネスツーリズムの構築や観光振興について多角的に研究を行っている。小堀ゼミでは東伊豆町の源泉を使って自宅でも温泉が楽しめる「温泉WAKUWAKU」の開発経験を生かして、足湯体験イベントの企画段階から参加し、東伊豆の魅力を伝えた。

宮城県東松島市

●古本ゼミナール×東松島市の 「竹あかり絵つけワークショップ」



イベントの受付に飾られた
絵付け竹あかり

このワークショップでは「市内におけるみちのく潮風トレイルコースの観光資源としての利活用」をテーマに7月29日（土）に行われる「ナイトトレイルイベント」のためにカキ養殖に使う竹製の「カキ棚」を再利用して竹あかりを制作した。

当日は、東松島市役所や近隣町会の御協力を得ながら、100名近い参加者があった。当日はフォトスポットの紹介やクイズコーナーを設け、参加する地元の方々のトレイルへの認知度を上げるとともに、地域の魅力再発見に繋がるイベントとなった。

社会福祉法人むうぷ

●社会福祉法人むうぷと包括連携協定を締結

8月14日（月）に社会福祉法人むうぷと包括連携協定を締結した。本学とむうぷは30年以上に渡って交流しており、様々な活動を通じて地域活性化に取り組んできた。相互の結びつきを一層強化し、それぞれの教育・研究・福祉支援等の機能を活用して地域社会に貢献することを目的として締結することとなった。

締結式に参加した渡邊卓学長は、「今後は現在行われている実習やボランティア活動の他にも大学の人的資源、知的資源を活用した共同研究を充実させ、地域の課題解決に向けて連携を推進していきたい」と挨拶した。

愛知県田原市

●愛知県田原市と包括連携協定を締結

8月18日（金）にオンラインにて愛知県田原市と観光振興・保健福祉分野などに関する包括連携協定を締結した。本学が中部地方の自治体と連携を結ぶのは初めてで、外国語学部 観光交流学科では新たな旅の形式として心身の健康や美容を盛り込んだ「ウェルネスツーリズム」に関する教育・研究をしており、今後は学生が田原市を訪れ、伊良湖温泉の実地調査などを行うことで教育と地域貢献活動とを展開していくことを計画している。
※8月24日付 東愛知新聞にも締結式の様子が掲載された。

三鷹市・特定非営利活動法人Mitakaみんなの防災

●杏林大学×三鷹市×Mitakaみんなの防災の
3者による防災協力体制の構築に関する連携協定を締結
9月14日（木）三鷹市役所にて大規模地震等に対する防災協力体制の構築に関して連携協定を締結するため、本学と三鷹市・特定非営利活動法人Mitakaみんなの防災の3者による締結式を実施した。

この協定は学生や教職員、市民等に対して自助と共助の防災意識の啓発活動を行うほか、防災ネットワークの構築、地域の災害リスクの定期的な評価・点検を行うことを目的とし、横断的なつながりを軸に「災害に備えるまちづくり」を目指したより発展的な取り組みを展開していくこととしている。

その他の地域交流活動

No.	種別	行事／活動名	実施期間	活動主体
1	教育	日野市教育委員会 保育カウンセリング	2023年 4 月 1 日（土）～ 2024年 3 月 1 日（金）	保健学部
2		いちよう塾講座 「英語で学ぶ社会的「性」とアンコンシャス・バイアス ～一挙両得！英語と男女共同参画の扉を同時に開く～」	2023年 4 月15日（土）～ 2023年 5 月 6 日（土）	外国語学部
3		足立区教育・保育行政への医療的ケア児支援に関する協力	2023年 4 月 1 日（土）～ 2024年 3 月31日（日）	小児看護学
4		八王子市男女共同参画推進審議会（会長）	2023年 5 月 1 日（月）～ 不定期 全 6 回 開催	外国語学部
5		羽村市教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行の状況の点検 及び評価（評価委員）	2023年 5 月 1 日（月）～ 不定期 全 2 回 開催	外国語学部
6		講演(ハイブリッド)：東大阪医療センタースクラム会 小児の便秘―診断と治療	2023年 6 月24日（土）	医学部
7		第 6 回多摩眼科 3 Mネットワーク	2023年 7 月27日（木）	医学部
8		令和 5 年度男女共同参画（管理職）研修（八王子市） 「管理職に求められる男女共同参画の視点―アンコンシャス・バイアスとは―」	2023年 7 月28日（金）	外国語学部
9		第31回多摩骨軟部研究会	2023年 8 月26日（土）	医学部
10		講演(ハイブリッド)：重症心身障がい児のこれからのケアについて考える会 小児の便秘―診断と治療	2023年 8 月31日（木）	医学部
11		武蔵野市立第 4 中学校PTA文化厚生委員会主催講演会	2023年 9 月30日（土）	保健学部
12		がん看護研修、がん看護研修スキルアップセミナー	2023年 9 月30日（土）～ 2024年 1 月19日（金） 年間 3 回開催	医学部付属病院
13		第72回 多摩整形外科医会	2023年10月14日（土）	医学部
14		第17回 TOWNミーティング 「褥瘡発生のメカニズムと治療の基本」	2023年11月 1 日（水）	医学部付属病院
15		八王子市立浅川小中学校保護者対象講演会 「今、子どもの未来のために大人ができること ～誰もが持っているアンコンシャス・バイアスって何？～」	2023年11月17日（金）	外国語学部
16		菊間千乃氏講演会&トークイベント それって思い込み？女性社員のホンネを知ろう！	2023年12月 7 日（木）	外国語学部
17		いちよう塾講座「AI時代の英語学習～成果を手繰り寄せる学習のツボ～」	2024年 2 月10日（土）～ 2024年 2 月24日（土）	外国語学部
18		杏林大学公開講演会 「今学びたい「気持ちを伝える」コミュニケーション―SNSの上手な使い方―」	2024年 2 月11日（日）	外国語学部
19		講演：こんにちは赤ちゃん訪問事業研修会 「子どもの便秘症を診る」	2024年 2 月14日（水）	医学部
20		第26回多摩骨代謝研究会	2024年 2 月17日（土）	医学部
21		緩和ケアチーム研修会「杏林大学病院で提供できるがん患者支援体制あれこれ」	2024年 3 月 4 日（月）	医学部付属病院
22		がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会	2023年 8 月27日（日） 2023年11月23日（木）	医学部付属病院
23		第72回 多摩リウマチ研究会	2023年10月28日（土）	医学部
24		小学校 5 年生 理科特別授業 人のたんじょう	2024年 1 月19日（金） 2024年 1 月29日（月）	医学部
25	地域教育 活性	三鷹医師会消化器研究会	2023年 6 月 7 日（水）	医学部
26		武蔵野消化器・肝疾患医療連携懇話会	2023年 6 月20日（火）	医学部
27		東京都病院薬剤師会 城南・島しょ支部勉強会	2023年 8 月29日（火）	医学部
28		東京都社会適応訓練事業による消化器系システムのオストメイト講習会	2023年 9 月24日（日）	医学部
29	健康	令和 5 年度 豊島区高齢福祉課 訪問事業	2023年 4 月 1 日（土）～ 2024年 3 月31日（日）	保健学部
30		がんと共にすこやかに生きる 講演会・患者交流会	2023年 6 月24日（土）～ 2024年 2 月24日（土） 年間 5 回開催	医学部付属病院
31		第29回日本ヘリコバクター学会学術集会・市民公開講座	2023年 7 月 1 日（土）・ 2023年 7 月30日（日）	医学部
32		第241回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会 東京都地方部会第241回学術講演会	2023年11月25日（土）	医学部
33		三鷹市福祉Laboどんぐり山オープンイベント 足の測定会	2023年11月25日（土）	医学部
34		第37回あんず耳鼻咽喉科病診連携会議・講習会	2024年 1 月24日（水）	医学部
35		「高齢者の運動のポイントとストレッチの実践」講座	2024年 2 月27日（火）	保健学部
36		第36回杏林大学耳鼻咽喉科病診連携会議・講習会	2023年 7 月19日（水）	医学部
37	教育健康	第24回東京都糖尿病協会 歩いて学ぶ糖尿病ウォークラリー	2023年 9 月24日（日）	医学部付属病院
39		第 1 回みんなのじんぞう教室	2023年11月 4 日（土）	医学部
40		八王子市母子保健事業 多胎ババママクラス	2023年 7 月18日（火） 2023年 8 月26日（土）	保健学部
41		三多摩腎疾患治療医会第80回研究会	2023年 5 月28日（日）	医学部
42	地域教育健康 活性	「患者中心のこれからのCKD診療」を考える オンライン講演会	2023年 9 月11日（月）	医学部
43		三鷹市市民向けACP啓発活動 「いつまでもわたしらしく生きるために～明るい終活はじめませんか～」	2023年10月18日（水）	保健学部
44		武蔵野市産婦人科医会学術集会	2023年10月21日（土）	医学部
45		第 7 回杏林大学医学部付属病院医療連携フォーラム	2023年11月 9 日（木）	医学部
46		第52回杏林医学会総会市民公開講座「遺伝性腫瘍の最新情報」	2023年11月18日（土）	医学部
47		三多摩腎疾患治療医会第81回研究会	2023年11月19日（日）	医学部
38		令和 5 年度 健康づくり事業推進指導者育成研修	2023年12月 8 日（金）	医学部
48		CKD Webセミナー～チームで取り組むCKD栄養指導～	2023年12月 4 日（月）	医学部
49		三鷹市大沢地域包括支援センター大沢地区住民向けACP啓発活動 「げんきな今こそはじめよう！明るい終活」	2023年12月13日（水）	保健学部
50		第 8 回Meet the expert in Tama「明日から使えるメンタルに役立つ漢方薬」	2024年 2 月 2 日（金）	医学部
51		三鷹市在宅医療・介護連携推進協議会、多職種連携推進・資源研修部会、 三鷹保健師看護師会主催 多職種連携ACP活動	2024年 3 月19日（火）	保健学部
52		CKD Webセミナー～チームで取り組むCKD栄養指導～	2023年10月25日（水）	医学部
53	その他	多胎児家庭訪問	2023年 4 月 1 日（土）～ 2024年 3 月31日（日）	保健学部
54		野村病院倫理審査委員会	2023年 4 月 1 日（土）～ 2024年 3 月31日（日）	保健学部
55		東京都訪問看護教育ステーション事業	2023年10月 1 日（日）～ 2023年12月31日（日）	医学部付属病院
56		多胎育児支援活動におけるピアサポーター養成	2023年12月 8 日（金）	保健学部
57	地域 活性	第 8 回井の頭乳腺疾患研究会（大学院講堂）	2023年10月25日（水）	医学部

2023年度 杏林大学公開講演会・公開講座

本学では、大学の持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、地（知）の拠点整備事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」を継承したテーマの他、医療系、人文社会科学系の公開講演会・公開講座を実施している。
 動画配信やZoomによるオンライン講演会と対面による講演会を計28回開催した。講演会の活動も活発になってきており、2023年度は昨年度よりさらに多くの回数を開催することができた。感染防止対策を講じたうえで多くの方に聴講いただき、好評であった。

杏林大学公開講演会一覧

No.	開催日	時間	講座名	講 師		開催場所
1	5月13日（土）	11:00-12:10	ヘミングウェイの短編を英語で味わう	外国語学部 教授	倉林 秀男	三鷹ネットワーク大学 オンライン
2	5月13日（土）	13:00-15:00	ひとが動く、まちが動く わたしたちが考えねばならない 「下り列車に乗った」国づくり	トカイナカ コンソーシアム代表	神山 典士 （外部講師）	井の頭キャンパス
3	5月27日（土）	13:55-16:00	杏林医学会講演会 「消化器がん医療の最前線 ー予防から早期発見、治療までー」	医学部 教授	阿部 展次	三鷹キャンパス
				医学部 教授	長島 文夫	
				医学部 准教授	鈴木 裕	
				医学部 講師	竹内 弘久	
				医学部 講師	吉敷 智和	
				医学部 学内講師	大野亜希子	
4	6月3日（土）	13:30-15:00	言葉のしていること	杏林大学 名誉教授	金田一秀穂	井の頭キャンパス
5	6月20日（火）	15:00-16:10	多様化する家族のカタチ ～離婚・再婚を経験する家族と子どものケア	保健学部 講師	大西 真美	三鷹ネットワーク大学 （Zoomオンライン開催）
6	7月1日（土） ～30日（日）	動画配信	受けようピロリ菌検診 ～子の世代へ感染を引き継がないために～	医学部 教授	大崎 敬子	You Tube配信
				医学部 准教授	三好 潤	
7	7月8日（土）	11:00-12:10	「ブーチンの戦争」と バイデン政権の「インド太平洋」戦略	総合政策学部 准教授	島村 直幸	三鷹ネットワーク大学 （Zoomオンライン開催）
8	7月22日（土）	14:00-16:00	骨粗しょう症予防教室～運動編～	保健学部 教授	石井 博之	羽村市 コミュニティセンターホール
9	8月30日（水）	11:00-12:10	ドイツの物語から読みとく 日本とドイツの親和性	外国語学部 准教授	田中 洋	三鷹ネットワーク大学 （Zoomオンライン開催）
10	9月7日（木）	10:20-11:50	健康と運動～活力ある人生を送るために～	保健学部 教授	石井 博之	八王子学園都市大学
11	9月14日（木）	15:00-17:00	学校保健講演会「子どもの眼の健康について」	医学部 准教授	鈴木 由美	三鷹市立第一小学校
12	9月26日（火）	11:00-12:10	心が豊かになる買い物 ーブランド論の視点から価格と価値を考える	外国語学部 講師	大熊美音子	三鷹ネットワーク大学 （Zoomオンライン開催）
13	9月30日（土）	13:00-15:30	ゆとろぎ 近・現代史講座 第1回 「近・現代の日本の女性の人権・新旧2つの 憲法下で女性の生活はどう変わったか？」	総合政策学部 准教授	北田 真理	羽村市 プリモホールゆとろぎ
14	10月12日（木）	10:20-11:50	AI技術によって 「なくなる仕事」「なくならない仕事」	保健学部 教授 データサイエンス 教育研究センター長	坪下 幸寛	八王子学園都市大学
15	10月18日（水）	14:00-16:00	いつまでもわたしらしく生きるために ～明るい終活はじめませんか～	保健学部 准教授	角田ますみ	三鷹市公会堂
16	10月26日（木）	14:00-15:10	最新の創傷治療	医学部 教授	大浦 紀彦	三鷹ネットワーク大学 （Zoomオンライン開催）
17	11月7日（火）	10:30-12:00	女性のトイレトラブル ～頻尿・尿漏れから骨盤臓器脱まで～	医学部 講師	金城 真実	三鷹ネットワーク大学
18	11月17日（金）	14:00-15:10	ココロの健康セミナー 「睡眠とメンタルヘルス」	医学部 講師	櫻井 準	羽村市 プリモホールゆとろぎ
19	11月18日（土）	13:30-15:30	第52回 杏林医学会市民公開講演会 「遺伝性腫瘍の最新情報」	医学部 教授	井本 滋	三鷹キャンパス
				医学部 教授	須並 英二	
				医学部 教授	小林 陽一	
				医学部 講師	関 大仁	
				付属病院遺伝子診療センター 認定遺伝カウンセラー	菊地 茉莉	

No.	開催日	時間	講座名	講 師	開催場所
20	11月22日（水）	14:00-16:00	子どもの人権を守るために ～コロナ禍を振り返り考える～	総合政策学部 准教授 北田 真理	羽村市 コミュニティセンターホール
21	12月 2 日（土）	10:20-16:50	日本健康科学学会 第38回学術大会 健康科学からみた化学物質の適正な利用の促進	保健学部 教授 照屋 浩司	全国町村会館
				医学部 客員教授 吉野 秀朗	
22	12月 6 日（水）	14:00-15:10	進化を続ける胃がん・大腸がんの内視鏡治療	医学部 講師 大野亜希子	三鷹ネットワーク大学 (Zoomオンライン開催)
23	12月 9 日（土）	13:30-15:30	学生企画連携講座（企画運営：古本ゼミナール） 散歩の達人直伝!! あなたの日常をちょっぴり変える 地元お散歩講座	株式会社 交通新聞社 大人のための首都圏 散策マガジン 「散歩の達人」編集長	羽村市 プリモホールゆとろぎ
24	12月16日（土）	10:20-11:50	ミドルシニア層のための 人生100年時代の人生設計	杏林大学事務局付 副部長 米津 哲也	八王子学園都市大学
25	2024年 1月24日（水）	15:00-16:10	成長チェーン店の出店場所に込めた経営戦略	総合政策学部 講師 加藤 拓	三鷹ネットワーク大学 (Zoomオンライン開催)
26	2024年 2月11日（日）	13:30-15:30	今学びたい「気持ちを伝える」コミュニケーション ～SNSの上手な使い方～	外国語学部 准教授 八木橋宏勇	羽村市 プリモホールゆとろぎ
27	2024年 3月 1 日（金）	14:00-16:00	市民向け ゲートキーパー養成講座	保健学部 教授 加藤 雅江	羽村市 プリモホールゆとろぎ
28	2024年 3月19日（火）	13:30-16:30	多職種でA・C・Pを考えよう	保健学部 准教授 角田ますみ	三鷹市公会堂
				保健学部 講師 寺島 涼子	

市民が聴講生として学生とともに学ぶ講座及び八王子学園都市大学用の講座を計34科目公開し、106名が受講しました。

三鷹市市民聴講生講座

【前期 4 月 ～ 7 月】

No.	開催日		時間	講座名	講 師
1	4 月 6 日 ～ 7 月27日	15回（各回木曜日）	9:00-10:30	外交政策論A	総合政策学部 准教授 島村 直幸
2	4 月 6 日 ～ 7 月27日	15回（各回木曜日）	16:20-17:50	福祉心理学	保健学部 講師 石川 智
3	4 月 6 日 ～ 7 月27日	15回（各回木曜日）	10:40-12:10	中東・アフリカの政治・経済	総合政策学部 客員教授 知原 信良
4	4 月 6 日 ～ 7 月27日	15回（各回木曜日）	13:00-14:30	アメリカ政治論	総合政策学部 准教授 島村 直幸
5	4 月 7 日 ～ 7 月21日	15回（各回金曜日）	13:00-14:30	時事問題研究B〈春〉	総合政策学部 准教授 島村 直幸
6	4 月 7 日 ～ 7 月21日	15回（各回金曜日）	14:40-16:10	韓国の文学・文化	外国語学部 教授 鄭 英淑
7	4 月 7 日 ～ 7 月21日	15回（各回金曜日）	10:40-12:10	表象文化論 I	外国語学部 教授 高木眞佐子
8	4 月 7 日 ～ 7 月21日	15回（各回金曜日）	13:00-14:30	英語学特論 I	外国語学部 教授 稲垣 大輔
9	4月10日 ～ 7月24日	15回（各回月曜日）	16:20-17:50	英語学特論Ⅳ	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
10	4月10日 ～ 7月24日	15回（各回月曜日）	10:40-12:10	アジアの文学・文化	外国語学部 特任教授 河路 由佳
11	4月11日 ～ 7月18日	15回（各回火曜日）	10:40-12:10	行動経済学	総合政策学部 准教授 糟谷 崇
12	4月11日 ～ 7月18日	15回（各回火曜日）	13:00-14:30	財政論	総合政策学部 客員教授 知原 信良
13	4月11日 ～ 7月18日	15回（各回火曜日）	13:00-14:30	日中比較文化論 I	外国語学部 客員教授 詹 滿江
14	4月12日 ～ 7月26日	15回（各回水曜日）	13:00-14:30	食品製造学	保健学部 准教授 大久 朋子

三鷹市市民聴講生講座

【後期 9 月 ～ 1 月】

No.	開催日		時間	講座名	講 師
1	9月18日 ～2024年 1月15日	15回（各回月曜日）	10:40-12:10	出店戦略	総合政策学部 講師 加藤 拓
2	9月18日 ～2024年 1月15日	15回（各回月曜日）	16:20-17:50	英語学演習Ⅳ	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
3	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	9:00-10:30	国際政治経済学	総合政策学部 准教授 三浦 秀之
4	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	10:40-12:10	宿泊産業論	外国語学部 准教授 西山 桂子
5	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	10:40-12:10	国際会計基準論	総合政策学部 教授 内藤 高雄
6	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	10:40-12:10	経営学総論	総合政策学部 准教授 糟谷 崇
7	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	13:00-14:30	英語学演習 I	外国語学部 教授 稲垣 大輔
8	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	13:00-14:30	日中比較文化論Ⅱ	外国語学部 客員教授 詹 滿江
9	9月21日 ～2024年 1月11日	15回（各回木曜日）	13:00-14:30	ヨーロッパ政治論	総合政策学部 准教授 島村 直幸
10	9月22日 ～2024年 1月12日	15回（各回金曜日）	13:00-14:30	時事問題研究B〈秋〉	総合政策学部 准教授 島村 直幸
11	9月22日 ～2024年 1月12日	15回（各回金曜日）	14:40-16:10	韓国語圏研究	外国語学部 教授 鄭 英淑

八王子学園都市大学・いちよう塾

【前期 4 月 ～ 8 月】

No.	開催日		時間	講座名	講 師
1	4 月15日 ～ 5 月 6 日	3 回（各回土曜日）	13:30-15:00	英語で学ぶ社会的「性」と アンコンシャス・バイアス ～一挙兩得!英語と男女共同参画の扉を同時に開く～	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
2	6 月 7 日 ～ 6 月21日	3 回（各回水曜日）	13:30-15:00	薬の正しい知識 ～普段飲んでいる薬、本当に解っていますか?～	保健学部 准教授 西村 伸大
3	8 月 7 日 ～ 8 月 9 日	3 回（月・火・水曜日）	10:20-11:50	ゲーテの戯曲「ファウスト」 ～三つの場面を解説します～	外国語学部 教授 長谷川弘子

八王子学園都市大学・いちよう塾

【後期 9 月 ～ 3 月】

No.	開催日		時間	講座名	講 師
1	9月18日 ～2024年 1月15日	15回（各回月曜日）	13:00-14:30	租税法Ⅱ	総合政策学部 客員教授 知原 信良
2	9月19日 ～ 12月26日	15回（各回火曜日）	9:00-10:30	家族法	総合政策学部 准教授 北田 真理
3	9月22日 ～2024年 1月12日	15回（各回金曜日）	14:40-16:10	日本語教育学特論Ⅱ ～日本語と出会った〈外国人〉～	外国語学部 特任教授 河路 由佳
4	2024年 1月13日 ～ 3月16日 ※都合により開講中止	3 回（各回土曜日）	13:30-15:00	今日から使える！ 「脳」のWellness講座 ～五感の快刺激が起す脳へのスローエイジング!～	保健学部 講師 青山 泉
5	2024年 2月10日 ～ 2月24日	3 回（各回土曜日）	18:00-19:30	AI時代の英語学習 ～成果を手繰り寄せる学習のツボ～	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
6	2024年 3月11日 ～ 3月13日	3 回（月・火・水曜日）	10:20-11:50	ゲーテの戯曲「ファウスト」 ～三つの場面を解説します～	外国語学部 教授 長谷川弘子